

社共¹に代る革命的労働者党創建にむけた

わが同盟の提案

「分裂から統合へ」

——我々はなんであり、どこから、どこへいこうとするのか——

目次

- | | | |
|-----|---|-------------|
| (一) | はじめに | 1 |
| (二) | ブンドの歴史 | 2 |
| (三) | われわれは何者なのか
われわれはどのよう ² に統合を戦取したのか
ブンドを止揚 ³ しうる単一党へ | 11 7 |
| (四) | 社共 ¹ に代る革命的
労働者党創建の大道へ
われわれはどこへ行こうとしているのか | 27 |
| (五) | (1) 情勢に ⁴ 応え統一協議会をつくろう
(2) 共産主義者の『統一協議会』作り急ごう
(3) 共産主義者の統一協議会』結成めざし
共同の準備開始しよう
「連合」で新たな革命党はできない
——「共産党の提案」にこたえて | 24 15
34 |

共産主義者同盟

(一) はじめに

—— 新たな時代を、ともに切り拓こう

全国の共産主義者、労働者の皆さん、
われわれは、昨八、年秋、結成以來、「今こそ社共で代る新しい革命的労働者党創建を」とよびかけてきました。

このための具体的方策として「八、年新年にあたって」「共産主義者の統、協議会」を提案し、この実現のために全力を注いできました。この提案は、全国から大きな共感と支持をえ、いま賛同された諸組織、共産主義者の中で、共同の準備活動が開始されています。

こうした過程で、また、今日に至るも、わが同盟に対して、「フンドとは何か、あなた方は、体何者なのか」とあるいは、「共産主義者の統、協議会とはどのようなものか」という質問が多々ありました。確かに四分五裂している日本共産主義運動の分散状況の中では、これら質問は当然のことと考へる。

わが同盟は、どこから来て、いま、どこにおり、そして、どこへいこうとしているのか。
それは、どのようなフンドの総括にもとづいているのか？
このささやかなリーフレットは、こうした質問に応えんとするものである。

この社共に代る革命的労働者党創建の歴史的事業は、ひとり共産同だけではないものでなく、全国の志を一つにする共産主義者、労働者の共同事業である。

今、激動する情勢は、日も早い日本労働者階級自らの真の単一の戦闘司令部——革命党創建を求めている。

われわれは、今秋、「八、年政治決戦」の只中で、社会主義革命のテコとなり、情勢を開く鍵ともなる社会党、日本共産党に代る革命党創建のため、「統、協議会」結成を断固闘い取るべく奮闘する。

この大事業を真に実現するためには、強力な、確固とした推進翼——機関中が必要である。

わが同盟は、この機関中となるべく、自力の党建設、闘い、行動する党への飛躍をはたし、奮闘する決意である。
わが共産同とともに、この大道をすすむことをよびかけます。

一九八一年十月

共産主義者同盟

(二) ブンドの歴史

われわれは「ブ」からきたか

(1) ブンドの結成

ブンドは、スターリン批判とハンガリア事件および日本共産党の綱領論争を契機としつつ、また、ソ連に対して一国社会主義と官僚主義と平和共存を批判し、プロレタリア世界革命を主張しつつ、日本共産党に対しては、平和「革命」路線、議会議主義を批判して、暴力革命、プロレタリア階級独裁の原則を堅持した。米帝国主義に従属、反米反独占の民族解放民主主義革命という規定を批判して、日本帝国主義の復活を主張し、日帝打倒・社会主義革命の路線を提起した。

また、ブンドは革命共同に対しては、思想的政治的影響を受けつつも、現実の人民闘争の政治的実践的指導よりも思想的理論的啓蒙を第一とする日和見主義を批判して、現実の人民闘争をプロレタリア革命に向けて指導するのを第一として革命党を建設しようとした。

こうしてブンドは、六〇年安保闘争において、学生運動―全学連の指導権を掌握し、社会党、共産党、総評に主導され、人民闘争の陣型（安保共闘）の中で、最も戦闘的な左派として闘い抜いた。

(2) 第一次ブンドの崩壊

六〇年安保闘争の直後、第一次ブンドは、民主主義闘争の最高点である自民党政府打倒闘争にまで登り詰めた人民闘争の先頭で闘いながらも敗北したことの総括をめぐる論争を契機として、六〇年に分裂した。分裂の基本的性格は革通派、プロ通派、戦旗派への三分解であった。

革通派は学生部分を中心であり、国家独占資本主義論、経済情勢の分析を基礎とした客観情勢の分析から、主体、労働者階級の階級闘争と革命党建設の発展段階を捨象して、直接的に主観的な任務方針を導くブンドの弱点を極限化し、六〇年安保闘争を革命へ発展、転化できなかったのは情勢分析の誤りによるとし、正しい経済情勢分析、国家独占資本主義論を追求するとし、国家独占資本主義の経済政策を阻止することでプロレタリア革命の実現を展望しようとした。これに反対して労働者部分を中心に形成されたのが戦旗派であり、ブンドを小ブルジョア急進主義、主観主義、大衆運動主義と総括し、革命的労働者党の建設を主張した。それは、ブンドの弱点を突くものではあったが、ブンドの革命性に対する右翼日和見主義的清算であり、ここから、六〇年安保闘争を通じて思想サークルにとどまっていた革共同全国委に移行したのである。

この両派に対して、ブンドと全学連の指導部を中心にプロ通派が結成され、ブンドの革命性を継承しようとしたが、ブンドの小ブルジョア急進主義の弱点を自己批判的に総括できず、政府問題に登り詰めた人民闘争から権力問題を意識して武装蜂起の思想的欠落を問題にしたが、それは、しかし、ブンドの弱点、革命的労働者党の建設の思想的欠落の問題を突き出すことになった。だが、ここで、プロ通派は総括論争を通して小ブルジョア急進主義を清算し、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得しブンドを統合し、革命的労働者党を建設することを放棄し、ブンドを清算し、革共同全国委に移行した（だから、後に革共同全国委の経済主義、組合主義を体现する革マル派との闘争に直面し、この部分は今日、中核派となっている）。

(3) 第二次ブンドの結成

七〇年安保闘争へ向う人民闘争の高揚を基礎に、第一次ブンド諸分派のうち、関西ブンドと独立派系、革通派系が分裂を克服し、一九六六年に統合して第二次ブンドを結成した。

第二次ブンドは、ベトナム民族解放闘争の前進（と中国のプロレタリア文化大革命）に促されつつ、これに敵対する革共同（中核派、革マル派）の「反帝・反スタ」の立場を批判し、これと結合しようとして「反帝」の立場に立ち、また、現実の人民闘争をプロレタリア革命に向けて指導するのを第一として革命党を建設するブンドの革命性を継承しつつ、これを「反帝闘争をプロレタリア革命へ」として追求する「戦略、戦術の党」の立場に立った。

そして、第二次ブンドでは、最初、六〇年安保闘争の総括から国家独占資本主義の経済政策阻止を導き出した旧革通派系のマル戦派が指導権を握り、「反帝闘争」を「生活と権利の実力防衛」の経済闘争に設定したが、後には、六〇年安保闘争の政治闘争としての発展過程を総括していた関西ブンドが取って代って指導権を奪い、「反帝闘争」

(4) 第二次ブンドの崩壊

七〇年安保闘争の真最中、第二次ブンドは六九年に分裂し、ブンドは大分派闘争の時期に入った。

第二次ブンドの分裂は、一方では、人民闘争が民主主義闘争の最高点である自民党政府打倒闘争にまで登り詰めたながらも、実力闘争がブルジョア国家権力、警察機動隊によって封じ込められ、他方では、人民闘争の中心であった学生運動が資本主義的帝国主義的大学制度に反対する全共闘運動として発展した時点における方針をめぐる論争として始まった。そして、学生党員に依拠した二派、つまり、一方では、政府問題、自民党政府打倒闘争を通して権力問題を意識し、ブルジョア国家権力打倒の武装蜂起を提起し、学生運動・全共闘運動に依拠しただけで実行しようとする「左」派、赤軍派と、他方では、学生運動・全共闘運動の発展の延長上に社会革命を展望する右派、これに対して、党機関メンバーと労働者党員に依拠し党建設と労働運動を主張したが、実際は保守主義、官僚主義と経済主義、組合主義でしかなかった中間派、この三分解として始まった。

しかし、分裂の基本的本質的性格は、六〇年安保闘争と第一次ブンドを総括せずに結成され、第二次ブンドは小ブルジョア急進主義であ

ったのが、武装闘争と労働運動をめぐる戦術問題を契機として、テロリズムと(戦闘的)経済主義に、すなわち、小ブル共産主義を根拠とする諸思想傾向に分裂し、再分裂し、再々分裂したといふことである。このことは、第一次ブンドが学生運動に依拠した小ブルジョア急進主義であり、革命的労働者党が存在しなかつたという主体の問題を捨象して、六〇年代安保闘争の発展過程を客観主義的に法則化していた関西ブンドの分派闘争にはっきりと表現されている。

武装闘争に着手しようとした部分はなく、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を労働者階級の階級闘争ではなく、学生運動で実現しようとし、テロリズムとなり、革命の根拠、原動力を主意・主観に求める空想共産主義を極限化したのである。労働運動に着手しようとした部分も、労働者階級の階級闘争を経済闘争や民主主義闘争の戦闘化にとどめ、プロレタリア階級独裁、社会主義革命へ発展させる指導を放棄し、革命運動を労働組合運動の戦闘化にとどめる(戦闘的)経済主義(戦闘的)組合主義に転落したのである。

(5) 分裂から統一ブンドのマルクス・レーニン主義派の統合

大分派闘争によって、ブンドは七〇年代初頭に完全に崩壊し、革命的左翼における人民闘争の主導権を完全に失い、中核派や第四インターや解放派に完全に奪われた。しかし、第二次ブンドの大分派闘争は七〇年代半ばに至って、基本的な性格が変化し、小ブルジョア急進主義のテロリズムと(戦闘的)経済主義への分裂から小ブルジョア急進主義とマルクス・レーニン主義の分裂に転化した。つまり、まず自らの分派の破産を認め、テロリズム、あるいは(戦闘的)経済主義の破産として自己批判的に総括し、そこからさらにブンドの分裂を党的破産と認めて総括を深めたのである。すなわち、こうした第二次ブンドの党的破産の底にある、思想にお

ける小ブル共産主義、政治における急進民主主義をえぐり出し、これらが党一組織上の無政府主義、経済主義として集中的にあらわれ、党の破産に至ったと総括をする。のみならず、この総括を総括一般にとどめず、マルクス・レーニン主義の復権を握りしめ、労働者階級を主体とする共産主義と労働運動の結合を核心とする綱領に打ち固め、組織思想を確立し、党組織の団結を当面する戦術上や、人間関係のそれとなく、綱領上のプロレタリア共産主義革命をめざす思想的統一に求めるといふ綱領・戦術・組織上の一大転換を図ったのである。

このような自己批判的総括を決定的に突きつけた契機の一つは、赤軍派の連合赤軍事件であり、総括の思想的基礎、方向性を決定的に指し示したのが二・一八ブンドの提起した資本主義批判等であった。こうした自己批判的総括、綱領・戦術・組織の大転換は、七十年代の労働運動はもとより、朝鮮、三里塚、部落、女性、「障害者」など日本階級闘争の前進の局面で問われた綱領上の諸問題とも相互に関連しつつ、一層深められた。

こうして、現在の「赫旗」は、期せずして始った七十年代の二時代に「党の革命」を通じて七・六事件以来のテロリズムと経済主義の両極の傾向の清算と止揚を、マルクス・レーニン主義の復権と、その下での「分裂から統合」を呼びかけあつた分派によって開けられた。すなわち、赤軍派の総括論争、分派闘争を通じて、ML派とプロ独派が、二・一八ブンドの分派闘争を通じてプロ独派が、再建委員派の分派闘争を通じて遊撃派が各々前後して登場し、一九七六年にプロ独派とプロ旗派が結合して紅旗派の結成、一九七九年に遊撃派とML派が結合して革命の旗の結成、さらに八十年紅旗派が二度目の統合をし、一九八一年秋に、革命の旗派と紅旗派が統合して、今日のわれわれ、赫旗派が結成されたのである。こうして、われわれは、分裂の時代から、統合の時代の開始を日本共産主義運動の現在の分散に終止符をうつその出発点を形成してきたのである。

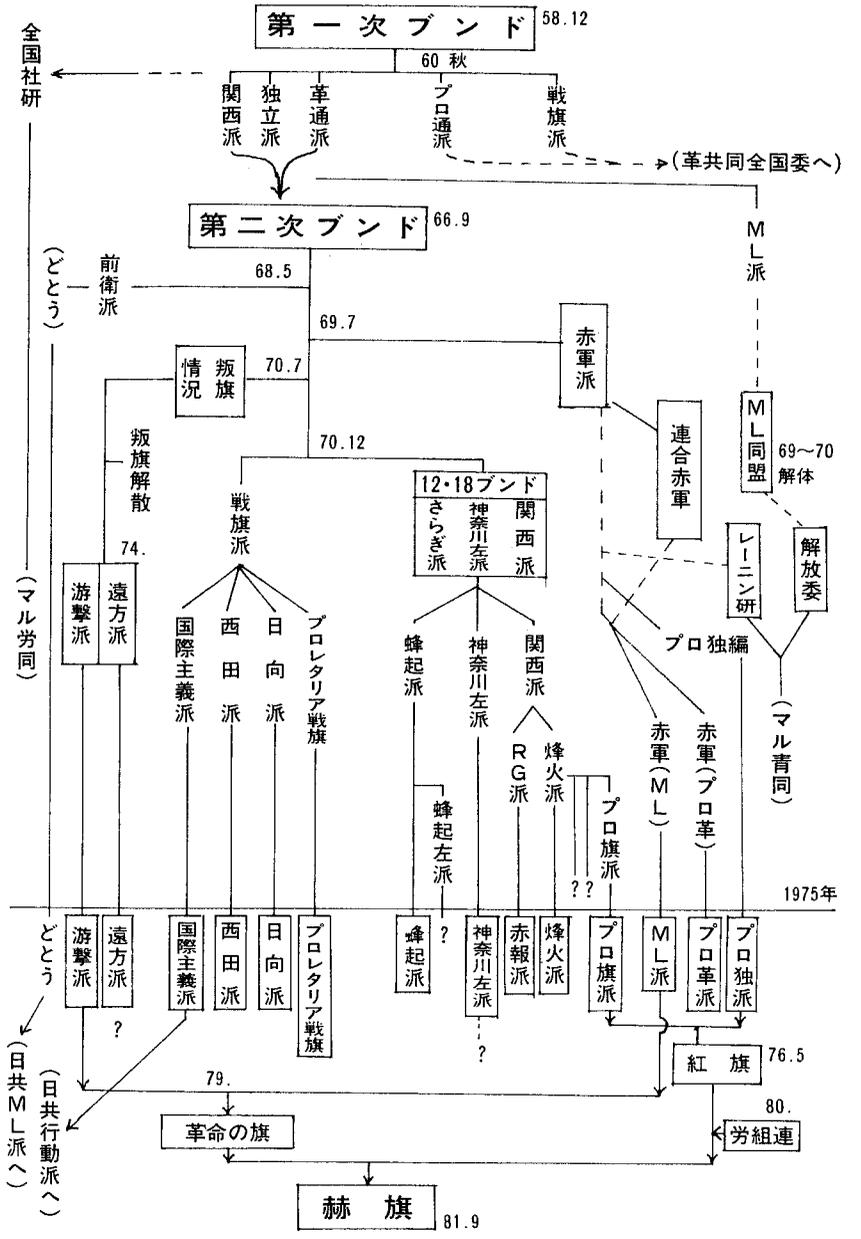
われわれは、第二次ブンドから生まれたブンドのマルクス・レーニン主義であり、総括論争を通じて小ブル急進主義を清算し、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得してブンドを統合するといふ、かつての第一次ブンドの指導部・プロ通派がなしえなかつた、第二次ブンドのうちで、12・18ブンドが試みてなしえず、放棄した困難な事業をなしてきた。

現在、革共同は、組合主義・経済主義から転化した社会帝国主義の革マル派、修正主義に通じる日和見主義の第四インター派、小ブル急進主義の中核派の三派に分立している。

彼らが八十年代階級闘争を日本共産党、社会党に代って、革命の勝利に向って指導することはできない。

われわれは、八十年代階級闘争の指導権を革共同から奪い返し、修正主義・日和見主義の社会党・日本共産党に代るマルクス・レーニン主義の革命的労働者党を創建し、プロレタリア社会主義革命の勝利を準備するであらう。

(註) ブンドの歴史は二十数年にわたる闘いの歴史である。いま、紙数の関係から、とくに党建設の側面におけるわれわれの軌跡にひきつけて、簡略に、その流れを追った。ブンド総括について他の文章でしめしているので省略したことをお断りする。故に図は、その大きな流れをつかむため詳細は省いていることも同様である。



(三) われわれは何者なのか

(1) われわれはどのような統合を戦取したか

I 分派から統合の時代へ

すべての同志、友人諸君、われわれ共産主義者同盟（紅旗）と共産主義者同盟（革命の旗）は、数年におよぶ粘りつよい論争をおしすすめ、さまざまな対立点を止揚し、ここに綱領と規約の一致をかちとり、組織を統一し、統合をかちとった。両組織の統合は「日本社会党、日本共産党にかわる単一の革的労働者党を創設する」（綱領）ための中核体をかちとるものであり、共産主義者が自らの歴史に責任をもち、労働者階級の歴史的利益と熱望に応えざる主体的局面を突破したのである。われわれ両派の前進は、党建設の現実的統一方法を定着させることに成功した。つまり、さまざまにことなつた道すじを通じてきた組織が、綱領の一致を基礎にすえ、戦術・組織の一致へと進むならば、大きな前進をわがものにできるということを実践的にしめし

てきた。われわれの綱領、路線にもづく党建設は、われわれ相互をより高いところへと押しあげ、ブンドから出発し、ブンドをさらに一歩ふみだして前進する可能性を獲得させたのである。それは、ブンドの正しい総括をなしきることによって、自らの弱点である急進民主主義をえぐりだし、マルクス・レーニン主義を獲得することを基礎にすえきっていくことこそ、党建設を一步一歩着実に前進させてきた根拠なのである。

統合への軌跡

共産主義者同盟（革命の旗）は、遊撃派とマルクス・レーニン主義派との統合によって開かれたブンドのマルクス・レーニン主義的分派である。第二次ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義に与ってかえるというブンドの総括のもとに、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線の一致のもとに綱領草案をかちとり、一九七九年七月に統合した。そして単一の全国党創建の中核体として自らを位置づけ、マルクス・レーニン主義分派に統合を呼びかけていった。統合の成果を二回大会でいっそう打ち固め、ひきつづき労働者党として自らをうち固める党建設をすすめ、第三回大会を獲得した。共産主義者同盟（紅旗）は、一九七六年三月に闘争の旗印として綱領を戦取し、綱領・戦術・組織路線の一致の下で二つのブンドの分派の統合をもって結成された。この意義は、マルクス・レーニン主義の諸原則の復権のもとに、日共現代修正主義とブンドの小ブル急進主義との総括と分界

線、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の当面する日本社会主義革命の政治

総路線等を綱領にうち固め、第二次ブンドの立場と新たな党建設にむかって、分裂から統合の時代をブンド史上初めてきり拓いたところにある。これ以降、紅旗派は、二度目の統合を一九七九年十二月に闘い取り、三つの分派が一つの組織に互いの歴史的経緯のちがいをこえて溶けあい、革命の大義のため奮闘してきた。

両派は、二年余にわたる綱領をめぐる討議のためのテーブルにつき、さまざまな曲折を経つつも、一致点をさらに深めうち固めることと、他方で不一致点を解消するために粘り強く討議をつづけてきた。そして両派は、各派二回づつ四回にわたる文書による討議をすすめることによって、一致点、不一致点の分界線をはっきりさせ、政治新聞上の統合論争とは異なった方法によってすすめてきた。この方法は、不一致点の解消のための討議を工業化させることに成功し、時間を飛躍的に短縮させ、統合をわがものとすることができた。

それは両派がブンドから出発し、ブンドを一步ふみだして前進することを共通の問題としてとらえきり、ブンド総括の基本点で一致しているのみならず、日本革命の政治路線、情勢の基本特徴ならびに党建設の基本方向での一致を獲得して、これを基本的な条件として、これによってのみ可能なものであった。われわれは相互に統合のための六条件を掲げており、全国の共産主義者、マルクス・レーニン主義分派に統合を呼びかけており、またこの六条件の一致のもとに、綱領の一致、戦術・組織の一致へとすすむことも一致していた。それ故、われわれは六条件の一致を獲得するための討議から開始していった。そこで統合の六条件をもちよ、検討を加え、一致点の確認を第一にし、六条件の準則をかちとった。そのうえで統合の六条件の不一致の解決をおこない、統一の綱領獲得のための準備をすすめていったのである。

II 総括の一致と綱領、組織、戦術の一致

われわれが掲げていた「統合のための六条件」は、第二次ブンドの急進民主主義・小ブル共産主義を清算し、マルクス・レーニン主義にとつてかえることを党の政治・思想・組織路線の全領域にわたって定式化したものである。

それは、ブンドの総括を基礎にすえたものである。われわれは、ブンドが日本階級闘争のなかで発揮した革命性については、断固として継承し、発展させるという態度は堅持しつつも、その歴史を通じて政治・思想・組織路線のなかで急進民主主義・小ブル共産主義の弱点を正面からとらえきり、党的敗北に導いた致命的欠陥を克服することが、ブンド総括の基本である。(詳細は二章)

われわれは、ブンド総括の基本線をもとに統合の六条件にそって具体的な問題にはいって行くことにする。

(1) ブンドの思想政治路線上の総括を一致させたうえで、マルクス・レーニン主義の単一党創建にむけての方法(段階性)の問題で意見の不一致があった。革命の旗派は「第三次ブンド」を、紅旗派は「単一の革命党」をそれぞれ主張していた。問題の核心は、第二次ブンド諸派が共産同の党的破産を根底的に総括せず、急進民主主義を温存したまま主張する「第三次ブンドの建設」と厳格な一線を画することの重要性を、まず第一にはっきりさせることであり、内容上においては、単一党建設の事業はおいて第二次ブンドの党的破産を正しく総括して、マルクス・レーニン主義の分派による第二次ブンドの党内党派闘争に組織的な結着をつけて、その成功を基礎に潮流を越えた団結をも射程に入れるべきであるということであった。両派はこの点で完全に一致し、同時に今後「第三次ブンドの創建」を掲げないことと一致し、「社共にかわる単一の革命的労働者党を創建するために奮闘する」と簡潔に定式化された。

思想路線の一致

(2) マルクス・レーニン主義の思想路線の完全な一致を獲得した。これは、かつての共産同がおち入った小ブル共産主義・急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の革命的な思想路線を獲得し、更に深化していくことを意味している。第一は原則的資本主義批判の確立についてである。現代修正主義、急進民主主義の資本主義批判を批判しきり、労働者階級の経済的隷属を暴露し、賃金奴隷制を明らかにするとともに、所有と労働の分離の問題を軸として、これの再確立をめざすことについては、討議が開始された段階で完全に一致しており、両者のあいだにはこの点に關して何の問題も存在していなかった。しいていえば、綱領に原則的資本主義批判を刻みこむ方法で若干の相違点があったが、それが、それも今回の綱領の作成時に両派の綱領を前進させるなかで解決された。そしてこの資本主義批判の確立は、社会主義と労働運動の結合のために、労働運動を主戦場とする闘いのなかで生かしていかなければならないと確認された。第二は、ソ連論についてである。われわれはソ連論の領域で常に先進的な位置を占めていた。それは紅旗派刊物ならびに長征二号で論文として打ち固められた。今日ソ連論のなかで特に重要なのは、ソ連の国家と社会の階級的な性格をその政治的経済的基礎を解明してどのように規定するかという問題である。両派は、今日のソ連は口先で社会主義を唱えているが、実際は現代修正主義の支配をテコとした官僚ブルジョア階級が支配する新しい形態の国家独占資本主義社会であり、米帝を中心として日・西欧帝と世界支配を争う帝國主義国家であるという見地に完全に一致した。だがソ連がプロレタリア独裁からブルジョア階級独裁へと転化した時期については、今日の段階では一致してはいない。だがこの不一致点は、前者の問題が一致していることによつて、ソ連論の更なる理論的深化を共同の課題として担い、党内討議を深めるならば解決しようという副軸であると確認した。

情勢認識と日本革命路線の一致

(3) 今日の情勢の基本特徴に關しては、ますます戦争の要素が増大しており、また他方、革命の要素が増大していることについては、認識が完全に一致している。(詳細は第三部の情勢分析を参照)

こうした情勢の基本特徴をふまえて次に問題になったのは、革命の旗派が統合の六条件第三項にかかげた「反ソ・反米・反階級闘争の国際人民闘争と日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線を結合して推進すること」についてであった。もちろん両派は、今日の民族解放闘争が「世界革命の主力軍」(革命の旗)「世界プロレタリア共産主義革命の推進翼」(紅旗)であることと、国際階級闘争のなかでのその位置については一致して

第三は、毛沢東思想の支持についてである。毛沢東思想を掲げることについて、紅旗派は、毛沢東の思想と理論がマルクス・レーニン主義の、中国

る。だが、両派の間の議論は、革命の旗派が今日の史上三度目の、「戦争と革命の時代」のなかで被抑圧民族のもつ政治的役割と帝國主義本國プロレタリア階級の國際主義的連帯の意義をつきだすうえで主眼においた。これにたいし、紅旗派は、わが国の政治路線を実行するうえで「反ソ・反米・反権の國際人民闘争」という規定が、わが国の革命路線をあいまいにし、日本の毛派潮流の社会愛國主義との嚴格な一線を画するべきでないという主張であった。そこで両派はまず論争点の整理のため國際路線の問題と、わが国のプロレタリア階級が当面する世界大戦の危険性の増大にたいしてとる態度の問題、そしてわが国の革命闘争を前進させるうえで、当面する任務の問題へと分けて論議を行った。その結果、世界プロレタリア共産主義革命の前進にむけ、國際プロレタリア階級が反帝反社帝の路線を堅持することでも一致した。そして今日の米ソの世界支配をめぐる争奪戦の激化、世界大戦の危険性の増大のなかで被抑圧民族の解放闘争がこれと真正面から対決しているという認識も一致した。そして帝國主義本國プロレタリア階級がこの世界大戦に備え、帝國主義戦争を革命でもってうちやぶるためにも被抑圧民族の闘いを支持し、これと固く團結し、革命を準備する必要があるという点で一致した。さらにはこうしたわが国の革命を準備するうえで、今日、中国の「三つの世界論」を世界主義的戦術とし、日ソ間の対立・争闘を帝國主義對立と認めず、社会愛國主義的態度をもってブルジョア階級と協調する部分との争闘が不可欠であることについても一致した。以上的一致をもとに両派は、この表記を六条件から削除し、また綱領に表記しないという判断に至った。この一致点は、今日多くの戦術的左翼が被抑圧民族との團結・連帯を口にはするが、しかしながら民族解放闘争のもつその世界的地位を正しく評価することができず、そしてもっとも重要なことは、それらの問題の内実をわが国の國家権力の打倒の問題として正しく結びつけて実践できないというなかで、われわれの見地のみが、真のプロレタリア國際主義の内実を闘いとるものとして、先の三点の一致をさらに豊富化していくことが同時に確認された。

(4) 日本革命の政治路線の基本的見地については、当初から完全に一致

していた。とりわけブンド総括で明らかのように、米帝問題を日本革命の権力問題として把握し、米帝一掃であれ、追放であれ、これがわが国のプロレタリア階級人民にとって「民族解放」や「民族独立」の課題でなく疑いなく社会主義革命の不可欠の任務の一環であるとの一致として確認されている。これは綱領の第四章に次のように刻みこまれた。それは、日本の國家と社会の性格、とりわけ米帝問題と日米安保体制の階級的性格を明らかにし、以上のことから導きだされる日本革命の性質が社会主義革命として定式化された。更にはわれわれの任務をしめすために、社会主義統一戦線の内容を明らかにしている。ここに両派のあいだにあった若干の相違は、まったく解消されたのである。

正規の攻囲と党建設の一致

(5) 今日の情勢、とりわけ国内情勢の問題で帝國主義戦争の準備と政治反動が強まると同時にプロレタリア階級と勤労人民の反抗戦もまた強まっていることを基本特徴としておさえることができる。そのうえでわれわれはかかる戦術思想を確定するのかが問われている。

かつて第二次ブンドがそうであったように政策阻止闘争の戦術的延長線上に「突撃戦」を展望するという急進民主主義ではなくして、こうした痛苦な敗北を救済し、敵の要塞を攻囲する「正規の攻囲」戦術を採用すべきであるとの一致した。そして今日、社会主義革命の実現にむけての物質的条件がますます成熟している現在、われわれの側の主体的条件のより一層の整備を急がねばならない。そのためには、今日の共産主義者の分裂に終止符をうち、分裂の時代から統合の時代へと、われわれの統合をテコとして進めていくことが要請されている。それは、マルクス・レーニン主義の全国単一党創建という単一の戦術司令部をつくりだし、そのもとに社会主義統一戦線の結成の現実性をつくりだす活動を強化していかねければならない。われわれは労働者階級のなかでの影響力をつくりだすためにねばり強く活動し、労働運動を主戦場とした闘いに充分に習熟していかねば

(2) ブンドを止揚しうる 単一党の大道へ

I ブンド総括の核心とは何か

われわれが相互にかかっていた統合のための六条件や今回戦取した綱領・規約もまた、その基礎にブンド総括をすえている。その総括上の基本は、わが国の階級闘争の歴史のなかでブンドの革命的意義を継承し、しかしながら、この後位性を歴史性ゆきに継承し、無総括派のような弱地に陥るのではなく、この意義をふまえたいうで、ブンドが歴史的に克服しきれなかった、ブンド史に貫いている思想政治路線上の弱点の真の切開をなすべきことが必要である。この観点からブンドを出発点として、更にブンドを一步踏みだし、革命的左翼総体をも対置化しうる地点を形成するために、不可欠の条件である。

このブンド総括については、両者はすでに様々な方面から諸論議に発表している。今回はその骨格を確認すれば十分である。

ブンドを評価し継承すべきは、第一に議會主義、ブルジョア民族主義の現代修正主義に転落した日共から決別し、暴力革命でブルジョア國家権力を打倒して、プロレタリア階級独裁を樹立する観点をうちだし、第二に日共の日帝の復活、対外侵略をみとめない反独占人民民主主義革命から社会主義革命へという二段階戦略を批判し、日帝打倒・社会主義革命から社会主義革命をうちだし、第三に絶えず大衆闘争の最前線にたつて國家権力と断固たたかってきたことである。つまり革共同の「人間解放の論理」ではなく、階級闘争の実践のなかで自らの革命的な世界観をうちたてようとしたことである。第四に、プロレタリア國際主義の旗を高く掲げようとしてき

はならない。われわれは、統合による党建設の実践を深め、その経験を総括し、一つの党建設上の定式とすることに成功してきたが、また今回の統合も更にわれわれの経験を豊かなものにするのであろう。今までの統合によって培ってきたそれぞれの組織路線を更に鍛えあげていくことが必要である。われわれの党建設の基本は、職業革命家を中核とし、工場細胞を基礎とした中央集権党である。このもとに、全國政治新聞を軸とした活動を定着させ、党の宣伝・煽動戦を飛躍的に発展させ、労働者大衆との接近を実現し、同時にこの活動を通じ、思想統合と階級闘争に対する政治指導を鍛え、真に全國政治新聞を「集團の組織者」にしよう条件を形成してきた。この主体的条件が路線を組織にまで貫くという党活動のスタイルを生みだしてきた。この側面を更に発展させていかなければならない。さらにわれわれは、幹部政策の基本に、プロレタリア幹部の隊列をつくりだしていかなければならない。これは革命的労働者党の一つの大きな要件であることも確認された。

綱領・戦術・組織の一致とは、それはとりもなおさず思想・政治・組織路線の一致であり、それは綱領・規約の一致としてつめあげられなければならない。簡潔に刻みこまれる必要がある。そして更に、その具体的内容と党活動の基本方向を定式化させるためには、テーゼをつくりだし、それに基づく活動をつくりだしていくことが党活動を工業化していくことができるのである。今大会で「労働運動の戦術テーゼ」(案)を採択し、更には女性解放・「障害者」解放のテーゼをそれぞれのこととしてひきつづき進めていくことが確認されている。

最後に次のことを明らかにしよう。先の統合の六条件のなかの相違点を具体的に解決することが可能となった基礎は、確認するまでもなく基本的なところで両派が一致を獲得していたことによる。それは革命の旗が、二回大会とその六中委によって、他方、紅旗派が、三回大会とその三中総によって、ともに自らを飛躍的に前進させる内在的契機を作りだした努力が、数年前に開始された論争をより高次な内容で一致させるペースを作りえたこともまた銘記されねばならない。

このように、旧左翼の現代修正主義を批判し、新左翼の出発点をつくりだしたブンドも、第一次、第二次を通じて党建設に勝利しえず、痛苦な党の敗北をきたしたことも明確にされなければならない。その敗北を導いたものは、第一マルクス・レーニン主義の原則を貫きえず、小ブルジョアの憤激に依拠し、社会主義革命の原動力を労働者階級の階級闘争に求めず、テロリズムに陥り、他方、経済闘争、民主主義闘争の闘争化を自己目的化し、経済主義を生みだすという急進民主主義に陥つてきた。この急進民主主義は、社会主義革命の実現を民主主義の実現へと、おきかえる権力問題にたいする日和見主義である。第二、トロツキズムに影響され、先進国革命主義に陥り、民族解放闘争の重視にせむせむ、プロレタリア階級独裁国家と現代修正主義国家の根本的分岐を見ぬけず、「労働者国家」と規定してきた。他方では、「ベトナム革命戦争勝利」を掲げたように、民族解放闘争との連帯を帝国主義本国のプロレタリアートの国際主義的任務をいふことと、民族解放闘争の今日の意義をつかみとる契機をもちつつも、根本的に切開いた。第三は、世界プロレタリア階級独裁を当面する任務とする傾向を持っていた。第四は、日帝の単純自立論の立場にたれ、米帝問題を日本革命の権力問題として把握することができなかった。それは米帝にたいする闘争を軽視することにつながった。

第四は、運動およびこれを導く戦術が全てであり、綱領は無ともいへば大衆運動主義に陥っていた。つまり戦術を組織の全体に貫いていく観点がない。第五は、「計画としての戦術」ではなく、「過程としての戦術」が基礎となっていたのである。それが宣伝・煽動の方法・観点にもあらわれ、全国政治新聞を軸とした党活動が軽視され、民主主義闘争の集会、デモへ党派部隊を登場させることにきり縮めており、労働運動を中心にすべき階級労働者階級との結びつきを弱めていた。第六は、党活動の中心を反帝闘争のヘゲモニーとしての組織活動においていた。第七は、大衆組織の左派フラク連合に組織建設がとどまっていた。それは、職業革命家を中核とする中央集権の非合法党を彼岸化するものとなっていた。これらのことは、各々別

命の総路線として具体化される。こうして、われわれは、ブンド総括を単なる弱点の指摘や総括一般にとめず、まさにいかなる綱領・路線におきかえ、開うかに体现してきた。と同時に、総括はそこにとどまるものではない。それは、いかなる党を創るかに具体し、実践化されなければならない。革命をやるからには、革命政党が必要である。革命の政党がなければ、マルクス・レーニン主義の革命理論と革命的風格にもとずいてうたてられた革命政党がなければ、労働者階級と広範な人民大衆を指導して帝国主義とその手先にも勝つことはできない。

そうであればこそ、われわれはこの綱領をかかげ、マルクス・レーニン主義の旗の下での全国の共産主義者、労働者の団結をよびかけるのである。われわれは、同盟の戦取をもつて、単なるブンドの統一や再建をめざすものではない。われわれは、綱領の冒頭に宣言したごとく日本共産党・日本社会党にかわる単一の革命的労働者党建設をめざすものである。社共にかわる革命党建設のためには、わが国の多数の共産主義者が、思想・政治の一致の下で、団結することが不可欠である。それは、ブンドにとどまらず、全ての潮流の諸党派、諸サークル、個人を対象とし、社共から離反する部分をも当然対象としなければならない。

しかし、われわれは、団結一般や当面する戦術や運動の利害によって団結する党派の横断的連合であったり、無定形な党派の統一戦線体であってはならないと考える。われわれは、これまで共産主義者の統一戦線、戦術、組織問題における原則的見地での一致をもとにはかる態度をとり実践してきた。その各々の骨格を、前史では、「六つの条件」として掲げてきた。わが同盟はこの基本的態度について変わるものではない。しかしながら、今日、全ての潮流を開いて、流動する大きな再編の気運を見え、われわれはこれまでのブンド内部の統合の数回の歴史的経験をふまえて、共産主義者の思想的統合を大きく発展させるため、その規準と方法を大きく構えて検討をせねばならない。

々なものでなく、それそれ関連しあっていたが、ブンドの思想・政治路線の根本的な弱点をしめすものであり、総じて急進民主主義政治とそれにとづく組織建設から脱脚しなかつたという致命的な欠陥をもっていたのである。

われわれは先にのべたように、ブンドの根本的な弱点の切開くなくして、継承すべき点を正しく発展させることはできない。今日のブンド系分派のなかで無総括を路線化したたり、清算主義におちいった部分が今日の情勢の激変にたえきれないことは歴史が証明することになるだろう。われわれは痛苦な党の敗北を真正面を受けとめ、克服すべき道を綱領・戦術・組織のその全体性の転換をなすべきことを宣言することができる。今後のわれわれの党建設・党活動の実践がこれらの諸点の克服の経験をより豊富化するであろうし、またしなければならぬ。このブンド総括を正しくなし得ることは、われわれをして新左翼全体を止揚しうる地歩を築きあげ、プロレタリア単一党創建のための潮流をこえた統合・団結を真に獲得しようといふこともまた銘記されなければならない。

II 大胆に潮流こえ進撃しよう

すでに、これまでの統合報告であきらかにしたごとく旧両派は、ブンドの革命的伝統を継承し、ブンド史総体の根底に貫く急進民主主義と小ブル共産主義思想を清算し、マルクス・レーニン主義を開いてるため、全力で闘ってきた。

資本主義批判。唯物史観。階級闘争の理論の獲得。「労働者階級の解放は、労働者階級自身の事業でしかありえない」との原則。そして革命の根本問題は権力問題であり、プロレタリア階級独裁の見地は綱領、戦術、組織全体を貫く核心であること。これらを実践的には共産主義と労働運動の結合として首尾一貫して押し進めなければならないこと。ここに両派が開いていたマルクス・レーニン主義の原則的見地があり、今日の思想的統一の核心があり、かつ、これを日本社会の現実にも正しく適用し、当面する日本革

綱領論争と綱領作成の組織化の方法、副軸における柔軟な態度、意見の不一致を原則的論争の保証と行動の統一で解決すること等、単一の革命的労働者党創設を積極的に推進するため、いくつかの諸問題に解決できる道をしめさねばならない。わが同盟がめざす単一党建設の道、とりわけ、統合の道は平坦ではない。われわれは、種々の偏向にたいして厳しい批判を展開する。しかし、他党派・他グループによるわれわれへの厳しい批判を歓迎し、誤りや不十分があれば率直に改める。こうした原則と路線をめぐる論争と相互批判を、われわれは口先だけのものとしないうで、これを実践に、すなわち労働運動に固く結びつけた共同の闘いの中につらぬくことを要求する。

こうした理論と実践の両面での一致こそ、党建設のカナメであり、この中であれわれは、革命の思想・政治のうえでこの確固とした統合をはかることをめざすものである。今日、革命的激動にむかう八十年代初頭の情勢は、社共をはじめ旧来の既成の左翼はいうにおよばず、新左翼を含む左翼総体を問わず、ふるいにかけ、内部分裂・対立・互解と流動・再編を余儀なくしている。労働者階級人民の危機感と闘いの発展は、好むと好まざるにかかわらず、全国的な党、広大な統一戦線の問題を避けては何ひとつ解決しえないところに達着している。

労働者階級は、大衆の先頭で闘い、革命の水路を開き、革命を勝利に導く新しい党を熱望している。共産主義者は、この情勢にたえ、八十年代階級闘争の最初の会戦に間にあうように、単一の革命的労働者党を創りださなければならない。「闘争に成功するには、明白な目標と方法がなければならない。民衆の憤怒だけに頼る非組織闘争は結局一時的なものにならざるをえない……民衆の支持基盤を獲得し、獲得された大衆に高い政治意識を与えることが幹起を成功に導く第一歩である」(光州白書)

かかる指導と役割を果しうるものは、労働者階級に深く依拠した、工場

細胞を基礎とする革命党だけである。

われわれは、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の社会主義革命を、数十万、数百万の全人民的武装蜂起をもって実現することで、朝鮮南部人民をはじめ全世界の兄弟・姉妹たちと国際主義的連帯をはたそうとしてい

る。われわれは、われわれの革命が血の海に沈んだ時に、この光州蜂起の教訓を想い出すであらうか、否／＼否／＼である。

労働者階級の解放のため、蜂起を指令し、組織し、革命を勝利に導く革命党の準備を急ごう！

われわれは、このために全国の誠実な共産主義者と心の底から閉結を願う。

(四) 社共ニ代る革命的労働者党創建の大道へ

われわれはどこのどこのところとしてい

(1) 情勢にんえ統一協議会をつくらう

はじめに

八十年代初頭以降、全世界的規模での戦争と革命の激動の始まりの情勢は、日をおって深まっている。

すぐる、八一年、日本階級闘争は、帝国主義か社会主義か、国家をめぐる諸階級・諸政治勢力の二分分裂・大再編が、その階級の基礎の深部から目に見える形をとって始つたことをしめた。

八一年秋に爆発した労働の右翼的統一をめぐる全国的大規模な闘いから

十二月十三日、十四日の統一準備会発足をめぐる攻防こそ、その証左に他ならない。

日本の労働者階級は、まさに自己の未来を制する決定的局面に際会しており、ひとつの歴史的転換点に立っているといつて過言ではない。それは、社共―総評労働運動の歴史的解体・崩壊を舞台に、われわれ、新左翼すべてが、荒々しく、ふるいにかけれられ、一体だれが残り、一体だれが転落したのかを一層鮮明にした。と同時に、旧い腐つて落ちた日和見主義者の後衛と交代して、真に革命的な真実の前衛部隊が進出する歴史的時代の幕あけでもあった。

そうであればこそ、われわれは、日本労働運動史の歴史的転回点に攻勢的に転化するために、八一年十二月がさらけ出した致命的弱点を冷徹な事実として受けとめねばならない。

それは、日本の金融独占ブルジョアジーとその手先・労働貴族どもが、自らの路線を固めた「基本構想」で武装し、その統一準備会発足―総評解体の組織戦に、どんだのに対して、闘う労働者は総じてこれと対決する闘う総路線と組織を持たないで、素手で立ち向っているという現実、集中的にあらわれている。

この点をわれわれは見落してはならない。情勢が要請する全体的な前衛の役割において、革命的左翼は無力であったことを肝に銘じなければなら

ない。

八一年秋、先進的労働者の仲間の中から、ふつふつとわき立ち、いまに続いて「われわれは何をめざすのか」「路線は」「われわれの闘う基本構想を」「闘う組織は」の声は、階級深部からの要求に他ならない。こうして八一年階級闘争は、われわれ左翼しすなわち社共を批判し、その反対派としてあった「共産主義者の危機をあぶり出し、待ったなしの課題をつき出したのである。」

それは、第一に、社会主義の路線と核心に導かれた階級的労働組合運動の「闘う基本構想」と、統一準備会と対決しうる「闘う労組連」を突出部隊とする組織戦術の実現である。第二に、反敵反安保・日韓・三里塚等を闘う労働者を中心とする全国的な大衆闘争機関の創設である。第三に、この前二者と有機的に結びつきつつも、一切のカギともなる全国単一の戦闘司令部・革命党と統一戦線の建設である。

今日、この課題を実現する気運と可能性は熟している。多くの共産主義者、先進的労働者の仲間達が、情勢の大波に打ちよせられる様に、闘いの中で「労働情報」を中心として、一つの隊伍を集められてきた。

これらの人々は、七十年代の分裂と混迷の一時代の中で、鍛えられ、互いにまだ日本階級闘争の一部分性をしか体現しえないにせよ、その最も誠実な、闘う先進的部分である。いま、この隊伍自らが、再び八十年代のふるいにかかり、分解・再編は不可避となっており、この中から革命的飛躍を求めて、先の課題に関する多方面からの模索が続けられている。と同時に、社共・総評の崩壊にともなうこれら下部の離反と流動とこれが結びつき始めている。

われわれは、なんとしても互いの意見のちがいを共に止揚し、團結する道を探し出し、この歴史的局面を攻勢的に突破し、いまだ、その勇姿をあらわしていない圧倒的多数の労働者階級の階級統一のため、これら課題を形あるもの、目に見えるものを実現せねばならない。

八二年の新年に、まず最初にすべてのカギとなるであろう社共にかわる革命的労働者党創建を具体的に推しすすめ、実現する方法について、われ

われの見解を提案する。

83年政治決戦の激動の中で 新旧左翼止揚する革命党を

八十年代の階級闘争は、いま「八三年政治決戦」に向って進んでおり、この節目における攻防の成否が、それ以降予想される、ブルジョア国家権力との会戦のカギをにぎるものとなることは必至である。

それは、八三年、衆参・地方をめぐる総選挙を、政治焦点として、議会主義政党はこれに向けた「八十年代綱領」づくりと組織体制準備に奔走している。

われわれは、この政治焦点で競われるものは、もはや、これまでの相対的安定期のような時期とは異なる重大な節目であると考ええる。

戦争と革命的激動する情勢に対応して、現在進んでいる事態の本質は、国家権力をめぐる諸階級・諸階層・諸政治勢力の大再編なのである。

その環は、ブルジョア独裁の階級的基礎における労働者階級内部の労働貴族を先とした帝国主義的解体攻撃・労働の産報化であり、この社会的・政治的支柱となってきた社共をはじめとする政党再編であり、かつまた、安保・自衛隊・行革問題に象徴される軍事・官僚機構などのブルジョア国家機構そのもの大再編である。

これは何を意味するのか。
帝国主義は息のない死の苦悶ともいえる危機に際会している。よって、この延命のために、総じて帝国主義戦争の道を急いでいる。

わが国の金融独占ブルジョアジイは米帝の指揮の下で、対ソ社共第三次世界大戦・朝鮮侵略反革命戦争のための挙国一致の戦争遂行体制を完成させんとしている。

すなわち、戦後革命の敗北を前提条件に、米帝を後たてとして朝鮮人民の生血を吸って復興した独占資本の「高度成長」を基礎に、労働運動における日和見主義・改良主義の開化、社共の議会主義路線による自民党単独政権の補完、自衛隊・在日米軍の再編等々——わが国のブルジョア独裁國家が米帝に深く依存しつつも、確立し、日帝の相対的安定期への基礎をかためたいわゆる「五五年体制」の全構造が、帝国主義の危機に対応して、その根底から崩壊し、大再編として進んでいるのである。ブルジョアジイは、そのブルジョア階級独裁のほころびと危機を乗り切るためには、激化する労働者階級人民の闘いを、この「戦争戦」に議会主義の枠内に吸引し、抑えこみ、大再編を完成させる政治的基礎を整え、一挙に帝国主義戦争の道へ乗り出さんというに他ならない。

それ故に「八三年政治決戦」はずでに始っており、まさに帝国主義の側からする経済、政治、軍事の全分野で（とりわけ経済、政治の集中的表現である安保・自衛隊をめぐって）戦争準備の重大な節目を形成する「政治決戦」なのである。

われわれは、この「八三年総選挙」を利用する力を持たねばならない。しかし、議会主義に対する反対派ではなく、戦争準備・政治反動と真向から対決する社会主義革命の準備をかけた、革命政治をもって正面戦をいどまねばならない。（第二新年号参照）。

55年体制の崩壊と激動する党派再編

日本の金融独占ブルジョアジイは、この八三年に向けて、自らの政治的代理人、鈴木政府と自民党を使って攻勢的に布陣をしき、かつ八十年同時選挙で獲得した「安定」過半数を防衛し、自民党単独政権の動搖を補完するため、民社党、公明党、社会党右派の取りこみと連合の準備を急いでいる。

これこそ、保守合同と左右社会党の統一によって「二大政党制」ともいわれるいわゆる「五五年体制」の崩壊と再編をめぐって、ブルジョア独裁の防衛と維持をかけた新たな「保守合同」ともいへべき政党再編のドラマス

ティックな展開の背景である。

それは、主に「八個師團」ともいわれる「派閥連合体」である自民党の日本安保、改憲をめぐる派閥抗争と依然としてその内にはらむ分裂の可能性に運動した、野党の帝国主義的再編として進んでいる。

それは、社共が社公民かめぐる路線的対峙と社共の分裂とともに、民社党の自民党をしるく超カカ派流的純化、公明党の「安保・自衛隊の容認」「全斗換政権への支持と擁護」と「自民党との連合をもめざす新しい憲法」等、「戦争と反動」の道の尖兵の役割を買って出んとしているのである。他方、議会のなかのおしやべりで「左」からブルジョア階級独裁の補充物となってきた社共も一層その右傾化と帝国主義への投降の道を急いでいる。

社会党の「道」見直しは、結局、資本主義との運命共同体への明確な路線転換をせしめており、もはや「左」の補充物ですらなくなりつつある。日共は、公明党・社会党が次々とルビコン河を渡って、帝国主義へ投降していく中で、これと一線をかまえて何がしかの「左」を堅持しているかみえる。しかし、日共の「平和と民主主義」「人民の議会主義」は、崩壊した「五五年体制を守れ」というに等しく、議会内で大臣のイスをめぐって社公民と先を競い、労働者階級人民の階級闘争を懐柔・圧殺し、ブルジョア独裁を防衛し、日帝の戦争準備をおおいかくしている。

こうして、歴史の転換期、危機の時代にはすべての政治勢力がその綱領・路線と実際の行動の中に、自らの本性を鋭く暴露せざるをえない。

それは、また他方、革命的左翼の登場と成長を促し、その内部での同様の「ふるい」となって貫徹せざるをえない。すなわち「五五年体制」の崩壊とドラスティックな再編は、この「左」からの補充物となってきた社共——総評ブロックの歴史的崩壊と同時に、これと一線を画し、革命的に闘いながら、結局この「反対物」に甘んじてきた新左翼運動の歴史的時代の終りをも鮮明にしたのである。

言いかえれば、この「五五年体制」の「左」からの補充物となった改良主義潮流が公然たる帝国主義潮流へ（資本主義の防衛、階級闘争の抑圧、

戦争と反動の手先)するりと右旋回し、他方で、広範な労働者階級が改良主義から離反を開始したことを示している。しかし、この改良主義と一線を画してきた新左翼総体が、この改良主義にとって代る新たな革命党として登場するその綱領・戦術・組織にわたる内実とその現実の指導力において、まったく微力であり、その全面的登場をなしえないということにおいて、新左翼約二十年が総括・止揚されねばならない。

新旧左翼の終えん

それは、何よりも今日の革命的左翼の四分五裂、分散状況と思想・政治的混沌に最も象徴されているといつてよい。

それは、一九五十年代半ば以降、議会主義とブルジョア民族主義の現代修正主義に転落した日共と決別し、暴力革命、プロ独、日帝打倒・社会主義革命を掲げて、新しい革命党創建をめざして、新左翼の出発点を形成したブンドの党的破産——四分五裂に最も際だって象徴されているといつても過言ではない。

革共同は第四インター、中核、革マルに分裂した。中核派は相かわらずの人民闘争の爆発で蜂起・内戦を展望する最も典型的な小ブル急進主義で低迷しており、第四インターは、この間ブンドに代って人民闘争の指導部として急成長してきたが、「労農政府樹立」と社共統一戦線、あるいはアファン・ポーランド問題をめぐる路線的動揺を深め、革マル派は、社民左派への純化から労働者の敵対物となり果てた。共労党も三分裂し、その大半が党的に解体している。毛派潮流の分解・再編も著しく、今日ではそのほとんどが愛国主義潮流へ合流し、また社青同解放派の分裂と解体状況、社会主義協会派からの一部離反部分の内再分裂、さらにはブンド潮流からの毛派への解体など「新左翼諸派の現状は、その潮流区別すら定かでない程の(確固とした政治勢力としてという意味)分散と離合集聚の極に達しているといつてよい。

ここには深い思想・政治的根拠がある。例えばブンドに典型的にみられるように、プロ独を要とした共産主義と労働運動の結合を実践的につかむ

連帯)をめぐって、あるいは核・原発をめぐって、旧来の反スタ・トロツキズムや現代修正主義の誤りはともかく、マルクス・レーニン主義の創造的發展が問われている時代である。

荒々しい嵐の時代の到来に、たち遅れ、試験にさらされているのは、まさに共産主義者であり、新左翼の破産をこえてすすむ革命的左翼の形成なのである。

すでにのべたように、「八三年政治決戦」が帝国主義の戦争準備のための労働・政治・軍事をめぐる党派を媒介とした政治・組織戦であればこそ、われわれもまた、これと対決する社会主義革命の準備をかけた、全分野における政治・組織戦として闘いぬき、この過程で新旧左翼を真正に打ちしうる新たな革命党を形成し、きたるべき二大階級の大会戦に向けた橋頭堡を築かねばならない。

この攻防の環は、賃金奴隷制の鎖をつよめるブルジョア階級独裁の擁護か、これからの解放をかけたプロ独の準備かをめぐって、労働の産報化に抗する闘いと結びついた安保・日韓、自衛隊・三里塚をめぐる攻防を焦点とする。

われわれは、これら闘いを「階級間の政治闘争のもつとも純粹で、完全で、はっきりした形の実現である」(レーニン)政党間の闘争として行うために、社共に代る革命的労働者党創建の具体的形成に着手し、八三年にはその中核体の形ある姿を登場させねば、闘いは勝負にすらならないであらう。

もちろん、この革命党は、あらゆる意味で旧来の新左翼諸党派の延長上につくられるべきではない。

わが同盟が、その結成宣言に掲げたように「ブンドを止揚し」、「社共に代る革命的労働者党創建」を掲げて、「潮流をこえた団結」を呼びかけるのは、まさにこうした意味に他ならない。

わが同盟は、自らのブンド総括を綱領・路線にうち固め、分裂から統合の時代をめざして、ささやかであってもブンドの五つの分派を七十年代半ばから今日まで統合してきた経験をふまえ、やっこの歴史的事業の一翼

ことができず、小ブルジョアの憤激に依拠し、社会主義革命の原動力を労働者階級の階級闘争にもとめず、一方でテロリズム、他方での経済主義になり、総じて急進民主主義政治に陥ってきた。急進民主主義は、端的にいえば、小ブル共産主義を基礎に、社会主義革命の実現を結局は、民主主義闘争すなわち、政府のあれこれの政策を阻止する闘争の徹底化、階級化の延長線上に展望するものであった。要するに社共の改良主義・議会主義に対する左からの政策的反対者としての位置を占めてきたのである。

こうしたブンドの小ブル共産主義・急進民主主義からする弱点は国際共産主義運動が前進し、帝国主義の相対的安定期が終りを告げんとしつつある時期に、事実、きたるべき革命闘争の一つの前置きとして闘われた六十年代末〜七十年の、安保闘争をめぐる会戦の中で、全面的にさらけ出されて以後、経済主義とテロリズムへの分裂——その拡大再生産の混沌の時代に入ったのである。

これは、ブンドにだけの特徴であったろうか。多かれ少かれ、かかる傾向こそ、この六十年代〜七十年代の一時期におけるわが国の共産主義運動を代表してきた新左翼に共通のものであるとわれわれは考える。

今日、戦争と革命の時代の諸相が一層鮮明となり、二大階級の真正面からの激突とブルジョア国家権力をめぐる大会戦が不可避に迫っている時代の中で、ふたたび、そして最後の、新左翼の急進民主主義ゆえの社共の政策反対者の位置と役割の限界が鋭く暴露されたのである。

新たな党建設の大道

すなわち、その主戦場が本格的に労働運動へ移行し、社共の反対者としてでなく、どの様な路線で、どの様な組織で、社共の改良主義・議会主義にとつてかわり、八十年代を闘うのかという先進的労働者の問題意識に答え、この部分でなく、総体的な日本革命の綱領・戦術・組織におきかえ、大衆闘争の最先頭に立ちきり、領導するのかが問われているのである。

おりしも、ソ連のアフガン侵略、ベトナム、中国の変質、ポーランド

を担う地平まで到達した。

八二年〜八三年は、この焦眉の、大規模で新しい質をもった建党運動の試金石とせねばならない。

II わが同盟の統合の新たな六条件

われわれがめざすものは、労働者階級の賃金奴隷制からの解放と、階級の廃止を実現し、全ての民族の平等と自由、抑圧された全人類の解放である。

このプロレタリアートの社会革命は、プロ独裁の実現を政治的条件に、銀行の没収をはじめ生産手段の私的所有を社会的所有にかえ、生産と分配の労働者統制等を必要とする。

この社会革命の実現のためには、われわれは、国際プロレタリアートの一員として、世界革命の有機的一構成部分として、日帝打倒・米帝掃蕩・プロ独樹立の日本社会主義革命の実現を当面する中心的政治任務としなければならぬ。

この革命を実現するためには、社共に代る全国統一の戦闘司令部——革命的労働者党が是非とも必要である。

社共に代る革命党建設のためには、わが国の多数の闘う共産主義者が、思想と政治の一致のもとで団結することが不可欠である。それは、ブンドにとどまらず、全ての潮流の諸党派、諸サークル、諸個人を対象とし、社共から離反する部分をも当然対象とする。

わが同盟は、その前史において七十年代の半同共闘、共産主義者の統合を、綱領・戦術・組織問題における原則的見地における一致をもちにはかる態度をとり、実践してきた。それは「六条件」を以て定式化されたもの

である。今日われわれは、それを「新六条件」として、当然その骨格を継承し、共産主義者の統合をおし進める。

それは、次のとおりである。

一 既成左翼はいうに及ばず、新左翼の破産を認め、その思想・政治路線上の誤りを自覚し、克服する必要があること。

二 マルクス・レーニン主義の世界観・基本原則で一致すること。

われわれはとくに、次の見地——マルクス・レーニン主義を今日のソ連現代修正主義の公式・教条とまきりばり一線を画してとらえていること、毛沢東思想をはじめ、世界の革命の歴史的教訓に学び、マルクス・レーニン主義の理論を、今日の世界と日本の具体的現実を基礎に、これを根本的に刷新する革命実践の統一として、発展させること、とりわけ、資本主義批判——労働者階級の解放は、労働者階級自身の事業でしかありえない、の原則——プロレタリア階級独裁の核心等を、共産主義と労働運動の結合として実践に貫くこと等——を強調する。

三 全世界の被抑民族・社会主義国と同結し、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の社会主義革命路線を闘い、これを遂行することによって一致すること。

われわれは、特に次の見地——朝鮮・アジアの革命との連動性を深く見すえ、これら革命と結合し、日本労働者階級の国際主義の内実を自国帝国主義打倒をカナメとした日本革命の政治路線として対象化すること、戦後いろいろの「従属・自立論争」の止揚、かつまた、「安保粉砕」の政治内容として、「日米安保体制」「在日米軍の駐留」を権力問題と把握し、「米帝一掃」の任務を社会主義革命の不可欠の任務ととらえること、また、われわれの掲げる「プロ独」の内実を単なる政治権力、暴力革命一般にとどめず、プロレタリアートの社会革命全般を包括し、これと深く結びついた権力問題として把握すること等——を強調する。

四 国際・国内情勢の現局面の基本認識を「戦争と革命の要素の増大」に一致すること。

情勢認識のうえでは、日帝が米帝世界戦略とその指揮の下で、日米安保

体制の再編強化を軸に進めている戦争の準備が、世界的規模での帝国主義戦争の一環であり、その照準が朝鮮半島にすえられていることの一致、帝国主義戦争の危険に対する革命的祖国敗北主義等の社会主義革命の諸原則で一致すること等を強調する。

われわれは、国際情勢を大きく規定するソ連問題について、今日のソ連は、官僚ブルジョア階級が支配する新しい形態での国家独占資本主義の社会であって、「口先の社会主義、実際の帝国主義」であると考えている。しかし、われわれは、統合の条件の中で、今日のソ連がアフガン、ポーランド問題にみられる如く、侵略主義と支配主義で被抑民族と国際プロレタリアートの敵対者となっている認識で一致するならば、その社会的階級の性格の定式化についての不一致は、統合後の粘りつよい論争で結着できると考える。

五 情勢の基本認識から導かれる当面の戦術「敵の要塞に対する正規の攻囲」戦術の採用で一致すること。

すなわち、われわれは、現局面で「直ちの突撃戦」を組織せず、全人民的武装蜂起と、プロ独裁を根本的に準備する活動を重視する。共産主義は、現実の社会生活のすべての側面から「成長」し、その芽ばえは闘いの中で、革命実践の中にあることを重視して、ブルジョア独裁のこの社会のすべての側面、分野から、これに対抗する労働者階級・人民の経済・政治・文化のあらゆる闘いを組織すること、その環が、共産主義と労働運動の結合の見地から、労働運動を主戦場に、プロレタリアの下層労働者の圧倒的多数の階級的統一をめざし、工場・地域を革命の砦にかえる活動にあり、この砦を、農民の闘いの砦、被搾取労働者階級の闘争拠点と結合させ、巨大な単一の革命の隊列を整えるにあること、またこのかなめが、単一の戦闘司令部——革命党と、労働者と、貧民の、同盟を軸に被差別・被抑圧人民大衆の結果する社会主義統一戦線の建設にあること、等を強調する。

六 職業革命家を中核とし、工場細胞を基礎として、民主集中制を組織原則とした労働者階級の革命党の組織路線で一致すること。

われわれは次の見地を強調する。

党はなにか特別の存在ではなく、労働者階級の一部で最も階級性、献身性に富むゆえに革命的であり、労働者階級全体の利害より他の利害を持たないこと、かつ党は、革命的組織的テロであり道具であること。

それ故、党は労働者階級人民の苦悩・怒り・闘いと結ぶこと、これを共有し、革命の全体の利害へと発展させる様に不断の自己変革を必要とすること。党の基礎が、労働者大衆に信頼された工場・地域の細胞にあること。

また、中央集権制の原則は党内民主主義の実現の基礎の上に組織されねばならず、党内論争——闘争の党内公開性の実施と民主的組織化、大会の重視、少数意見の保障、革命家の思想・政治第一の作風、労働者幹部政策、大衆的党風等々である。

われわれは、この新六条件を掲げるにあたって、これら原則と路線が口先だけのものではならず、実践に貫かれ、大衆闘争の中での検証の必要を重視する。この様な理論と実践の両面における一致と統一こそ、党建設のカナメであり、共産主義者と労働者の団結を促進し、単一の戦闘司令部建設の前進にとって欠かすことのできないことであると考える。

III 共産主義者の統一協議会をひらく

一章で分析したごとく、「八三年政治決戦」は、この政治・組織戦の攻防の環をにぎりしめ、労働者階級の歴史的未来をかけて、迫りくる八〇年代の大会戦の前しよう戦を開き、領導する社共にかわる革命的労働者党創建をそのカギとしている。

わが同盟が、七十年代半ば以降、単一の戦闘司令部建設をめざして、分裂から統合の時代をきり開いてきたことは、最早周知の事実である。しか

し、その成果は、マルクス・レーニン主義の革命的労働者党の中核の萌芽を形成しつつも、いまださやかなものでしかない。

わが同盟は、この歴史的事業の情勢に応え、より一層大胆な、大衆的な発展を促し、かつ二者間の統合をも否定せず、統合を推進する方法として、「統一協議会の結成」を提案する。

(1) なぜ統一協議会が必要なのか

労働階級人民が熱望してやまない単一の戦闘司令部——社共にかわる革命的労働者党創建のためには、全ての闘う、誠実な共産主義者、労働者の団結が是非とも必要であることは、だれもが認めるところである。

団結の必要は、各潮流の諸分派が日本階級闘争の個々の部分性をしか代表しえず、かつ、その諸潮流自らがその独自性を解体している現実を踏えて、これら部分の各々の蓄積と主張を、単一の思想、政治・組織に相互正場する過程を、日本革命の綱領・路線の確定と革命党創建の共同事業としてしか闘い取ることができないからである。

情勢は急であり、この具体化は待たないであり、「八三年政治決戦」を節目とした八十年代半ばに至るまでに、この戦闘司令部としての革命党を、その中核をくり出さずして分散を是認することは、革命的左翼の武装解除を意味し、最早反動というものであろう。

今日、すでにくりかえしのべてきたように、その諸条件が広々と開けつつある。

八十年代初めから、多くの心ある同志達から、いくつもの提案がしめされ、プロッタの形成、横断的左翼の形成、統一戦線党構想等が試みられつつある。しかし、それらの試みは、いまだ、互いの歴史的経緯・見解のちがいを、一体何から、どのように、何を規準として、かつ、どのように大規模に、かつ確固として原則的に表現していくかの根本的問題に、解決の方法を十分しめしているとはいえないと考える。

われわれは、単なる二者間にこだわらず、革命党の緊要と統合の必要を認め、複数の潮流をもこえた共産主義分派、労働者グループの間で、統一のための協議会を準備して、その中で思想的統一を固め取ることが可能であり、かつ時宜にかなったものであると考える。

この共産主義者の協議会の中で、互いの綱領的団結のための路線論議と共に、一致しえる共同行動、共同闘争を行いつつ、信頼を育み、意見のちがいを粘りつよのりこえて、統一を固め取ることができると確信する。今日、全国に至る所で、社共や新左翼から離反し、かつどの分派にも所属せず、誠実に闘い、革命への志を失わずに、革命党のために働く用意のある多くの同志達が存在している。また八十年代は腐りきった旧い自称「活動家」に代って、若木のような、いまだどの分派も糾合することのできない新しい活動家層が日々生み出されていく時代である。こうした部分に呼びかけ、働きかけ、労働者階級の最も戦闘的な層に依拠して党をつくり出すためにも、こうした大胆な建党運動が不可欠であると考える。

こうした統一協議会の全過程を、われわれが、労働者階級に深く深く依拠して、論争と共同闘争を公開しつつ、労働運動を主戦場としたあらゆる階級闘争の中で、彼らの闘いと結びついてなすことが重要である。このことが実現されるなら、必ずやわれわれは、真に労働者大衆の信頼を得た、大衆的な革命党をつくり出すことができるかと確信する。この時、われわれは、はじめて新旧左翼に対する彼らの深い不信をふり払い、われわれ自らの限界を克服し、革命的左翼としての飛躍を固め取ることができると確信する。

(2) 統一協議会は何をめざすのか

統一協議会をめざす方向は、日本革命を勝利に導きえる革命的労働者党

条主義、セクト主義を排して、互いの見解を尊重しつつ、思想・政治路線を、指導者の個人的思いつきによるのではなく、階級闘争の歴史的経験と蓄積の総括のなから、現実の正しい分析のなから導く態度を貫くことである。論争の作風を共同して作りだして、理論と実践の統一をかなめ、意見の不一致がどの様な性格であり、団結にとって主軸か副軸かを見きわめる態度をしっかりと養い育てることを互いの確認としなければならぬ。

こうした共産主義者の基本的態度が貫かれるならば、ねばり強い論争と一定の共同行動の中で、互いの意見のちがいを止揚し、統一綱領を固め取ることが可能であると確信する。なぜなら、労働者階級の利害はひとつであり、また世界と日本の現実もひとつであるからである。

(3) 何から始めるべきなのか

われわれは、まず、この統一協議会の提案に賛同する共産主義者、労働者諸グループの間で十分討議をかさね、「準備会」を組織し、そこで、この協議会の政治規程などをまとめていくことから始めるべきであると考へている。

情勢の推移からするならば、われわれは、八二年中には、この準備会を成しとげるべきである。

と同時に、われわれは、こうした統一協議会を、田十三派とか八派会議とかの単なる現にある分派の機械的な寄り合いに墮さしめないためにも、これらが、労働運動の現場で、工場・地域を革命の砦とする共同に根ざし、支えられて進むべきであると考える。

また、この統一協議会の準備は、公然・非公然と進んでいる様々な方面での、新しい潮流形成、再編成、あるいは、巾の広い戦線的結合の存在を否定したり、排除したりせずにそれらと有機的に連動して進むべきであると考える。

創建以外にはない。「革命党創建のための統合をめざす統一のための機関」という点において、全国大衆共同機関や、様々な政治共同などの統一戦線体や、単なる研究機関、共同戦線的な運動協議会と明確に区別される共産主義者の協議会である。

われわれは、この点において、いささかのあいまいさがあっては、いたづらに混乱を招くだけであると考える。また、統一協議会を構成する対象は一定の規程が必要である。

われわれは、こう考へている。統一協議会の規程・運営方法を含むその「要項」のようなものは、ひとり、われわれが提案するのではなく、この必要と意義を認め、賛同する部分の中で、十分討議のうえで決められるべきである。

ここで、わが同盟は、先の統一新六条件を、決して統一協議会の政治規程だと考へたり、これを強制するものではないことを表明しておかねばならない。もちろんわれわれは、先きの統合の条件を満たす諸分派であれば、明日にも統合を望み、かつ、その実現を互いに保証をしようが、統一協議会の規程は、統合の協議を開始することのできるいくつかの最低の規程に備えなければならぬと考へている。わが同盟は、統一協議会に賛同する諸分派・グループの皆さんに、この協議会の規程を提案することを要請するし、そうした諸準備の中で、われわれの規程をも提案していく用意のあることを表明する。

こうした点を鮮明にして、統一協議会を呼びかけていくうえで、政治規程以前の、共産主義者の作風ともいうべき前提的問題について、若手の見解をのべておかねばならない。

それは、「党建設のための協議をする」以上、「思想政治面での路線が正しいかどうか全てを決定することからする路線論議、あるいは、今日、すべての共産主義者の共通の課題となっている共産主義・社会主義論争に、共同で結着をつけるためには、われわれが共に、旧い様々なこれまでの限界を克服する立場を確認し出発しなければならぬことである。それらは、一言でいえば、マルクス・レーニン主義の復権を期して、教

また、八十年代情勢は、党の問題をカギとはするが、同時に要請されている、「闘う労組連」形成や、「全国政治共同機関」等の広大な統一戦線を要求しており、この任務を統一協議会へ解消せず、併行して実行し、これと連動させねばならないことは、もはやいいうまでもない。

統一協議会を真に成功させ、確固として推進するためには、その推進部隊、この核となる部分が必要である。

わが同盟は、このために、われわれ自らの独自の任務をいささかもゆるがせることなく、新六条件にもとづく統合とかつ自力の党建設をそれ故にこそ強めて、この事業の最先頭で働く決意であることを表明する。全国の共産主義者、労働者の皆さん、

社共にかわる革命的労働者党創建に向け、勇躍して、統一協議会をつくらう！

わが同盟は、全精力を傾けて、この実現のため、奮闘することを八二年の年頭にあたって宣言する。

八三年「政治決戦」——八〇年代の来るべきブルジョア国家権力との大会戦に備えて、労働者階級の戦闘司令部を固め取るう！

統一協議会を創りだし、八二年を日本共産主義運動の統合の時代への歴史的転換点としよう！

全国の共産主義者、団結せよ！

第二回中央委員会総会決議

（「旗」八二年一月一日、六号から）

(2) 共産主義者の『統一協議会』作り急ぐ

一、「提案」後の諸反応

「全国の共産主義者に訴える。情勢に應え、統一協議会をつくらう」の「提案」を、わが同盟は、第二回中央委員会総会決議として、新年、機関紙六号で発表した。この反響は、われわれの予想をこえていた。それは、関東・関西の書店で一週間以内に機関紙が売り切れ、今日に至るもこの号は売れ続けているという事実を象徴されている。われわれは「提案」以後、この「協議会」構想をもつて、多くの共産主義者・労働者グループと意見交換をした。政治の世界でありがちな、様々な憶測とヤユとが絶えずつきまとうてであったが、直接・間接を問わず、おしなべて「提案」自体は、時宜を得た、積極的・大胆なものとして肯定されたといつてよい。

「前からこういうものが必要だと考えていた」「原則的な提案として非常によい」「八十年代の展望を持つことができる提案だ」「旧来の党派の単なる延長線上に新しい党を展望せず、こうしたやり方で互いを相互に止揚することが必要だ」「これを讀んだとき、これだ！参加していくべきだと思った」等、本当にたくさんの方々から、「提案」の「趣旨」についての賛意が寄せられた。とりわけ、われわれが勇気づけられたのは、沖縄や東北に至るまでこの「提案」が読まれ、とくに

と同時に、それはそれで、他方で反「赫旗」の包圍網の形成と、様々な中傷の中に、自ら身を置くことにもなった。

われわれは、自らの力量を知っており、これらは身にあまる光栄として、甘んじて受け、われわれの信じることを、断じて進みたいと考えている。

二、疑問に答える

わが同盟は、「統一協議会」の事業を大切に、何としても成功させたいと考えている。この事業は、その「準備会」が形成される時には、われわれを離れて、誠実な、真に党建設を追求する共産主義者の、共同の事業となるであろう。

しかし、今日、「提案」以降、先の積極的な共鳴と共に、多くの方々から多岐にわたる疑問と意見が寄せられた。それらの多くは、ただちに、われわれが単独で返答すべきものと、今後の準備過程で、共に担う共産主義者グループとの間の検討によって、「協議会」自体の構想の中で解決し、答えていくものがあるであろう。

ここでは、われわれは、非常に前提的な、「提案」それ自体の趣旨に関わる疑問に應えて、「統一協議会」への混乱と誤解を生まないようにする必要がある。

①「赫旗の新六条件」は協議会の規準ではないのか？

多くの方々から、こうした質問を受けた。まず結論からいえば「ノー」である。この疑問は、「提案」に、わが同盟が過去・現在とついでいる。二者間の統合の思想的・政治的条件を併記したことよつてであるが、先を読み進めれば、「協議会」の規準はこれにこだわらぬものであることが明記されている。「協議会」の規準は共に担う、賛同された人々の「準備会」討議の過程で定められるべきであると考えている。もちろん、われわれは、今日の段階で、わが同盟としての規準と連

工場・地域で社共にかわる党を熱望し、自らをも党形成する用意のある、労働者サークルの共感が伝えられたことであつた。

今日、われわれは、こうした「提案」の積極的反応を、決して「赫旗」の自画自賛のために描こうというのではない。そこには、次のような諸事情と根拠があると考ええる。

それは、第一に、八十年代に入つて、一部分を除く多くの共産主義者が、労働者階級人民の「単一の戦闘司令部」——革命党の建設の緊要性と、そのための共産主義者の「大連合」「統合」を主張し始め、ひたつた大勢を形成しつつあること。

第二に、戦争と革命の八十年代情勢の急激な深化の中で、社共等の既成勢力の分解・右傾化が著しく進み、ここからの労働者階級の離反の開始、あるいは、反戦反核の戦後史上空前の、まったく新しい拡がりや深さをもつた大衆闘争の高揚のきざし等、階級的基礎の深部の激動の始まりが、第一の点をいっそうつき動かしていること。

第三に、単なる連合や横断一般でなく、「統一綱領」にもとづく「統一綱領」という原則的な革命党建設の方法が、折りからの労働運動内部の「行動綱領」「労働者綱領」等の問題意識と結びつき、受け入れられる条件を形成していたこと。——等である。

これらを基礎に、特に、わが「赫旗」紙上で「提案」というものに意味があるならば、わが同盟が他に先がけて、七十年代の一時代に、ブンドの総括をひきつぎ「綱領」にもとづく「統一」と、「単一党の建設」を呼びかけ、過去いく度かになつて共産主義者の統合を實踐し、ささやかであっても、その地平の上で「統一協議会」の可能性を示していることであらう。

こうして、「提案」に対する諸反応は、革命の客観的条件の成熟にもかかわらず、主体的条件の未成熟という致命の欠陥、とりわけ、日本共産主義運動の分散と混迷を打破するという条件が成熟しつつあることを示している。われわれの「提案」が、その「分裂から統合へ」の気運を具体化する「一石」となることを願っている。

営方法についての見解を用意しており、すでにいくつかの組織の中から、それについての意見表明がなされている。しかし、この建党運動で重要なことは、この指とまれ式な方法でなく、日本革命の総路線を打ち固めた統一綱領作成と、そのももとの組織の統一を図るための基礎づくりと、相互止揚可能な条件づくりであつて、規準等はその第一歩として、十分含意されねばならないからである。

②「結局、運動体、あるいは潮流形成になつてしまふのではないのか？」

賛意を寄せられた方々の中から、こうした危惧がのべられ、かつまた「統一協議会」のイメージを直接に交換した中から、こうした運動体に純化しがちな意見がないわけではなかつた。それは、今日の右翼的労働統一に抗する、あるいは反戦反安保、日韓、三里塚等々あらゆる階級闘争の諸分野で、全国的な政治共闘機関を準備することが問われていることよつてである。

しかし、われわれは、つくるべき「協議会」の性格を、「提案」では「革命党創建のための統合をめざす統一機関」として、「運動協議会」とは厳格に区別することを主張している。もちろん、われわれは、一致しえる共同闘争を行い、互いの信頼を育み、意見のちがいを闘いの中で粘り強く解決することを、「統一協議会」はその条件にしなければならぬと考える。

しかし、あくまで目的は「党形成」である。それ故に、運動の発展それ自体を目的とする「全国政治共闘機関」創建をめざすような「運動協議会」は、別途並行して、幅広く組織されるべきであると考ええる。党建設と大衆運動はバラバラのものでありえず、「統一協議会」はそれらと連動して、互いの発展を促すよう機能せざるをえないであらう。そしてまた、潮流やブロックを決して目的としなが、現実政治の中で、この建党運動それ自体が、その過程において、一時的に「潮流」となることそれ自体の可能性を、われわれは決して恐れてはならない

のではないだろうか。

⑧「趣旨について賛成だが本当に潮流をこえて、大きな統一が可能だろうか？」

こうした、素朴な質問が卒直に出され、かつまた、いまだに多くの共産主義者の胸の底に流れていることを、われわれは感じている。そこには、今日の共産主義者が直面している、互いの分散を止揚するに足る統一・綱領の、思想的・理論的諸準備の立ち遅れや、その内容が、ソ連や中国の革命実践や変質をこえて進まねばならない大きさへの自覚からくる、たじろぎも誰かにある。

しかし、いまだ根強い共産主義者の「統一事業」への疑心暗鬼は、長い分散と混沌の一時代の中での、小政治サークル根性や経験主義によっているのではないだろうか。

もちろん、われわれは、この事業が過去のブンドの統合の水準と努力の範囲をこえた、想像をこえる困難なことであろうと考えている。しかし、ささやかなわれわれの経験からして、まったく不可能なことではないと固く確信している。そしてまた、われわれ日本の革命的左翼は、真に日本労働者階級人民の解放をめざすならば、この困難な、偉大な統一の道を実現しなければならぬ。

だからこそ、われわれは、その一歩の新しい胎動を、かたちあるものとするため、兎戯にも似た相互のレッテル貼りや、批判一般をやめねばならない。互いのかけてきた旗をあいまいにするのでなく、高々とかかげて、共に闘う中で、原則的な論争や学習を組織し、相互にそれを検証し、日本革命の単一の旗印へと育て上げていく中で、相互止揚するべきである。

三、本格的な準備を

われわれは、こうした共感や支持、あるいは、先の前提的な疑問を

である。

この過程は、前にものべたように、各々の共産主義者に、自らの組織と実践の間に生じてくるであろう矛盾や、小さなセクショナルな党派利害を捨てて、自らが傷つくことすらも恐れない覚悟と、大胆な試行錯誤を要求する想像に余る集団的な共闘となるであろう。

しかし、われわれは、真に革命的な新しい党を形成するためには、この大きな、前人未踏ともいえる峰に挑戦し、敢然とたち向って登る以外にはないと考える。

われわれは、そのために、まず「協議会」の規準の討議を開始するであろう。そして、このことは、現にある様々な方面での、共産主義者の新しい試みと決して対立させず、互いの独自性を保持しつつ、閉鎖的にならず、開かれたものとして、当面進むことが望ましい。

八十年代の階級闘争は、今、「八三年政治決戦」に向って進んでおり、この節目における攻防の成否が、それ以降予想されるブルジョア国家権力との会戦の、鍵をにぎるは必死である。

ここにおける社会主義革命の準備をかけた、政治・組織戦を、共に全分野で担い抜き、嵐のような闘争の只中で「協議会」の準備をなしたり、杜共にかかわる革命的労働者党創建の具体的形成を、「かたちあるものとするのは、焦眉の課題である。

八十年代の階級闘争の展望は、ここにかかっているといつて過言ではない。

われわれは、このため、われわれのなしうることを全力で果す決意である。

仕事を急ごう！

（「赫旗」四月二十五日、十三号より）

こえて、「協議会」の具体化に関するたくさんの貴重な意見を、かたちあるものとして、「統一協議会」の本格的な準備を開始せねばならない。

それは、当面新しい「革命党」を創建することに賛同する共産主義者の間で、「協議会」の規準・運営方法・活動スタイル等々の「要項」をめぐる、互いの討議を正式に開始し、「準備会」を発足させることである。

「团结は偉大なことであり、偉大なスローガンである。だが労働者の運動と目に見えないマルクス主義者の团结であって、マルクス主義者と目に見えないマルクス主義者のわい曲者との团结ではない」。これは、かつてレーニンが強調したことであった。真の共産主義者の思想的統一・团结は、あらゆる修正主義や日和見主義との断固たる、明確な闘争と境界線にもとづいて達成できるであろう。

しかし、この境界線は、教条的なセクト主義者によって画策されるようなものにならぬよう、われわれは互いに自戒しあわねばならない。とりわけ、ソ連のアフガン侵略、ベトナム・中国の変質、ポーランド「連帯」をめぐる、あるいは核・原発をめぐる、旧来の反スタ・トロツキズムやソ連等、現代修正主義の誤りはともかく、われわれのめざす新しい社会主義の道をめぐって、マルクス・レーニン主義の創造的発展が開かれている時代であるからである。

このためにわれわれは、国際主義運動のこれまでの歴史のなかの、革命の成功と失敗の経験を熟考し、正しい結論と有効な教訓を導き、かつ、日本の現実の革命実践の互いの総括と結び合わせながら、日本革命の正しい総路線に鍛え上げ、統一綱領獲得に結実させ、团结を開いとらねばならない。

この作業は、「党とはいったい何なのか」「なぜ党は必要なのか」「いかなる党なのか」を不断に、根本から問い直すことと一体であり、そのことよって日本労働者階級の、自己解放の巨大な闘いのエネルギーと創造力と出会い、真に革命的な党に相互止揚する過程そのもの

③ 『共産主義者の統一協議会』結成めざし、共同の準備開始しよう

一、見解を表明するにあたって

去る一月、わが同盟が機関紙『赫旗』紙上を通じ、全国の共産主義者に「統一協議会」の結成を訴えて以来、早や半年が経過しています。

この間の様々な反応と疑問については、同じく『赫旗』13号を通じて答えてきたところです。わが同盟は今日、この「共産主義者の統一協議会」への賛同や支持や共感が、一般的雰囲気には流されないで、是非とも「共同の準備」のための具体的な作業に形あるものとなることを願っています。

折りから、わが同盟が共同の準備を呼びかけた諸派のうちのいくつかの部分から、先行した具体的提案と見解を出されました。また多くの方々から「赫旗」の統一協議会の政治規準・運営方法についての具体的な問題意識が聞きたい」という意見が寄せられています。

「統一協議会」に関する具体的な諸見解、労働者党全国委員の「われわれの提案」における政治規準の提起、労働者党全国委員の「共産主義者の連合について」の討論テーマの提出、赫旗・共産同の「赫旗派による提起への見解」の支持表明と疑問提出などが際立っています。それらは各々当面する「共産主義者の統一事業」への方法上の若干のニュアンスのちがいがいせんあるものの、この歴史的事業の確かな可能性

をしめています。

とりわけ、戦旗・共産同の「赫旗への見解」は、その虚心たんかないな卒直さにおいて、今後の統合に向けた党派関係の新しい作風をうち立てるうえで、誠にさわやかな一つの典型をしめしていると思われるは受けとめるものです。彼らはこういつています。

われわれ戦旗・共産同はこの呼びかけの基本精神に対し、同調する。実践的に幾多の共産主義者の分派の統合が可能であり、それをつうじ、日本階級闘争が前進し、ひいては、レーニン主義的な革命的労働者党建設の道が切り拓かれていくならばこれは画期的なことであり、おおいに尽力すべきものであると思う。われわれは今後、この試みの成功のために、およびながら努力してゆきたい。しかしわれわれ戦旗・共産同は六十年代以来レーニン主義的な単一党建設をかかげるなかで、七十年代前半の分裂の経験は有しているものな、未だかつて他の共産主義分派との実践的統合を実現したというような歴史性を全くもっていない。ゆえにこうした呼びかけに対しては、一定恐ろざらざるを及ぼす、展望を見出しえないのも客観的事実である。この文書は実に卒直に、この不安と逡巡が、かつまた、後に具体的に答えることにするわれわれに対する同志的批判のべられていて、

わが同盟はわが同盟へのしんらつな批判を含むといえども、こうした卒直な意見が、悪意でなく団結を願う立場から出ているがゆえに、誠実に受けとめています。

さてわれわれは、先にもあげた様々な、すでに「共同の準備」の予備的・前提的討議ともいえる諸見解が提出されていることに、深い敬意を払いたいと考えています。その上で、今日のこの局面で、戦旗・共産同のためはじめ諸党派・諸同志から発せられている「統一協議会」具体化のための、もう一つ突っ込んだわれわれの見解を鮮明にすることがわが同盟の義務であると考えました。もちろんわれわれは、準備会のテーブルのつくり前に、一般的な機関紙上での、ただちの論議を組織するつもりは毛頭ありません。なぜなら、それらは準備会の過程で、

……荒々しい嵐の時代の到来に、立ち遅れ、試練にさらされているのは、まさに共産主義者である」。

今日、三月広島〜五月東京反戦反核集会の戦後史上最大の新しい闘いの様相は、共産主義者の立ち遅れを一層鋭くつき出しました。すなわち、この数十万あるいは百万単位の反戦反核の大衆行動を、労働者階級を領導者として、帝国主義戦争か社会主義革命かをめぐる分岐に組織しめく、統一戦線戦術や革命的大衆行動を指定し、指導する能力をもった社共に代る革命政党建設の緊要さを解決すること抜きに、八十年代階級闘争の展望は切り開きえないからです。

故にこそ、一般的な団結や、連合の必要一般、論議一般から一歩ふみ出し、共産主義者の団結を形あるものに、日本労働者階級・人民の熱望に応え、その希望・展望を彼ら自らの全国単一の戦闘司令部の建設の問題として、新しい建党運動を創り出すことが問われています。まず、「統一協議会」を形成し、統一綱領を準備し、この下での思想的団結をはかって、社共に代る革命的労働者党創建の大道へふみ出すことこそ、現在可能な革命的方策に他なりません。

「統一協議会」を形成するためには、現存する諸分派・諸グループ・個人が革命的左翼の潮流の様々な「系譜」を政治的・組織的に刻印されている現実を無視できません。

こうした部分が大半「新左翼」であり、六十年代、七十年代の日本階級闘争の部分と共に担ってきたこともまた現実です。こうした部分が団結するためには、互いの総括を明らかとし、その共有が必要です。これは、先の理由で、一見、途方もない作業のように考えられます。

しかしわれわれは、それは可能であると確信しています。なぜなら、どの潮流も歴史を異にするといえ、日本共産党から各々の時期にこれを批判し、分岐して「新左翼」の一時代を共有しているからです。だから「統一協議会」形成は、互いの分派・潮流の自己総括を「新左翼総括」へ高めあげ、共有し、これを戦後共産主義運動の総括——主に日本共産党批判へ打ち固める共同作業へ高める中で、互いの総括には

共同してその運営原則をつくり出し、しかるべくルールにもとずいて積極的に行わなければならない。この統合の事業は、日本の共産主義者のいまだ根深いセクト主義によつてそこなわれるのは、火をみるよりは明らかと考えざるからです。

こうした新しい事態の展開をふまえて、「統一協議会」に関するわが同盟の政治基準・運営に関する見解と、特殊「赫旗」への問いかけ・批判に答えて、以下の態度を鮮明にするものです。同志的批判と検討をお願いしたいと考えます。

二、統一協議会の規準について

①まず目的の一致を

まず最初に重要な問題は、「統一協議会」が何をめざすのかで一致することであり、

われわれは、周知の如く「統一協議会」の性格を、共産主義者の統合と団結を実現し、社共に代る革命的労働者党創建のための「統一の機関」であると提案してきました。

今なぜ、共産主義者の団結・統合が緊要の課題となっているかについて、一月提案は主に次のようにのべています。「今日、戦争と革命の時代の諸様相が一層鮮明となり、二大階級の真正面からの激突とブルジョア国家権力をめぐる大会戦が不可避に迫っている時代の中で、ふたたび、そして最後の、新左翼の急進民主主義ゆえの社共の政策反対者の位置と役割の限界が鋭く暴露されたのである。すなわち、その主戦場が本格的に労働運動へ移行し、社共の反対者としてでなく、どのような路線で、どのような組織で、社共の改良主義・議会主義にとつてかわり、八十年代を闘うのかという先進的労働者の問題意識に応え、この部分でなく、総体的な日本革命の綱領・戦術・組織におきかえ、大衆闘争の最先頭に立ち切り、領導するのかが問われている。

らむ矛盾を止揚することができるのです。ここで新しい、社共に代る革命的労働者党の山発点——共通土俵が形成されるにちがいないからです。ここで各々が「われわれだけが唯一正しかった」式の唯我独尊の立場をすて、客観的に自己をとらえることが自戒されるべきです。「わが同盟のこの点に関する内容は、一月提案でブンドの総括から素描していますが、今後わが見地を提案する予定です」。

更に「統一協議会」が新しい党をつくる目的で、致する際に、次の点が大切です。

「統一協議会」は、日本労働者階級・人民の階級闘争の真只中で、これを基礎とし、これを確固と領導するにふさわしい力を育て、高いめあうことを不可分とする新しい建党運動だということです。単なる共産主義分派の「サロンのおしゃべり」から形成されようはずがなく、八十年代階級闘争の中に「協議会」としての共通する合言葉をつくり出し、全国の工場・地域・農村の戦場で、同じ釜のメシを食い、共に試されつつ、戦闘的団結を培うことを、当然のことに前提とすべきです。これは、綱領問題の討議を決して従属的にとらえるのではなく、まさに統一綱領を生きた闘いの行動指針として闘い取ることで不可分の問題です。

われわれは、自らの存在と意識の有限性、認識するところの限りあることを深く自覚するならば、日本と世界の現実、ここにおける階級闘争こそ豊饒の大地であることをふまえて、革命理論と実践の創造的統一・結合を互いにめざすことが強調されねばならない。

②思想的・政治的規準

新しい革命的労働者党創建のための「協議会」であれば、その思想的・政治的規準はいかなるものに準拠すべきであろうか。

わが同盟は、最低限の規準を次のように考えます。

① いかなる革命をめざすのかという点で、労働者階級を主体・主導階級とする真のプロレタリア共産主義（社会主義）革命の立場を

貫くことと一致すること。

すなわち、「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業でしかありえない」という見地に立脚して、階級の廃止を実現し、全ての民族の平等と自由、抑圧された全人類の解放をめざす立場である。これは表現をかえて、コミュニオン型の社会と国家の実現をめざす立場と云ってよいであらう。

こうした革命の立場は、おのずとこの革命を実現するための党の役割・性格を問うものである。われわれは、党を何か特別の存在とするのでなく、労働者階級・人民の一部であり、党の一切の利害を労働者階級・人民の利害に従属させ、その苦悩・怒り・闘いに結びつき、その創意性・自発性にもとづく自己解放のエネルギーを解き放ち、彼らが自らを組織するのを援助し、革命全体の利害へと発展させる革命の政治的・組織的な道具・テコであると考ええる。故にわれわれのめざすべき党は、不断に自らをも変革の対象とすることのできる、労働者階級・人民の創造物としての革命的労働者政党でなければならぬ。

② マルクス・レーニン主義の原則の堅持とその創造的發展を基礎に、今日のソ連を反面教師とし、現代修正主義と一線を画して、新しい社会主義の創造をめざすこと。

すなわち、マルクス・レーニン主義を今日のソ連や日本「共産党」の現代修正主義の公式・教条や、かつまた新たな「マルクス葬送派」のそれともきつぱり一線を画してとらえること。

ソ連をはじめ「既成社会主義」の変質を共に総括し、これを克服するために、マルクス・レーニン主義の創造的發展を共同作業としておしすすめる立場を明確にする。

③ 日本労働者階級・人民の当面する主要な敵である日本帝国主義を打倒する立場、かつ出来あいのブルジョア国家権力を利用するのではなく、これを粉砕して、自らの国家権力・プロ独国家を開いて取る立場を貫くこと。

④ プロレタリア国際主義、とりわけアジア・朝鮮をはじめとする

第三世界人民との連帯を要し日本革命を展望する立場を貫くこと。

わが国の労働者階級は、世界プロレタリアートの一部隊として、世界プロレタリアートの共通の終局目標を達成するために、全世界のプロレタリアート・被抑圧民族と団結せねばならない。ここで、コスモポリタンの世界革命主義やその裏返しの一國主義を共に排して、世界革命の有機的・構成部分として日本革命を展望する。この際に、日本帝国主義の歴史的現実からして「他民族を抑圧する民族に自由はありえない」の原則を實踐し、第三世界人民、とりわけアジア・朝鮮人民との国際連帯を開いて取る立場を貫かねばならぬ。

※ ※ ※

以上が、わが同盟が考える最底の思想的・政治的規準です。これらは、今日まで共産主義者の自明の核心に他ならず、よって、日共現代修正主義との一線を画す（なぜ日共等を対象としないのかもである）もの以上ではありません。

もちろん、この一つ一つの内幕が今日、問い直され、深められなければならぬのも自明です。

わが同盟は、新しい革命党創建のために、不可欠とする綱領上の討議テーマをいくつか挙げる必要と考えています。しかしそれは「統一協議会」そのものの中で提出し、検討すべきであって、そのテーマ・問題意識によって「協議会」の枠を狭めたり、強制したりすることはまちがいであると考えています。

と同時に、この①から④までの規準そのものも、わが同盟の見解であって、準備会の中での他の諸見解とつきあわせ、討議に付されるべきであると考えています。

③ 団結の作風を

統一協議会を形成するためには、おのずとその運営についてのいくつかのとりきめが必要と思われる。それについて最底、次の二点が確認されなければならないと考えます。

三、いくつかの批判に答える

こうした諸見解を明らかにした上で、次には、わが同盟への名指しの問いかげや批判や、様々な御意見は是非とも答えることにしたい。（それ故に、一、二以下の文を相対的に区別して、かつまた、すでに前段までに答えたことと異なる点については関連させてとらえていただきたい。）

① 戦旗・共産同の諸君へ

彼らの問いかげは次の二点にしばられます。

① 第一は、連合党的性格、党内フラクション政治で必然的に破壊した第二次ブンドの痛苦な歴史的経験を、戦旗指導部は実践的にこえられるのだという確証をどこでつかみえたのであろうか、というものです。

われわれは、一言でいえば綱領にもとづく思想的統一・団結という方法による、「戦旗」に至る数回の統合が可能であり、これが労働者大衆の信をえたという事実に対する確信だと答えたい。

すなわち、第二次ブンドの政治的・思想的・組織的に単一性を欠いた連合党的性格と党内フラクション政治の横行についての戦旗・共産同の諸君の指摘に、われわれも共鳴します。しかし、われわれはこうした第二次ブンドの党的現象の底にある、思想における小ブル共産主義、政治における急進民主主義政治をえぐり出し、これらが党一組織上の無政府主義・経済主義として集中的にあらわれ、党の破産に至ったと総括を深めてきました。のみならず、われわれはこの総括を総括一般にとどめず、マルクス・レーニン主義の復権を握りしめ、労働者階級を主体とする共産主義と労働運動の結合を核心とする綱領（第二次ブンドの指導部がついに作り出すことのできなかつた）に打ち固め、組織思想を確立し、党組織の団結を、当面する戦術上や人間関係

① 一定の共同行動の中で相互信頼を培い、闘争の中で団結する。

当面、何を共同闘争とするかは準備会の中で十分討議されるべきである。現下の労働統一に反対する闘い（労組連問題を含む）を基礎に、安保・日韓・三里塚などを中心とする八十年代階級闘争の前進を共に闘い取る姿勢が大切である。もちろん、互いの歴史的経緯や現状の取り組みの強弱に、十分配慮がなされることが必要と思われる。

② 意見の対立は、暴力的形態で解決せず、団結の願いから出発した同志的な相互批判にもとづき、革命陣営内部の矛盾として解決・止揚する。

われわれの陣営の内部のサークル主義・セクト主義をいかに克服し、新しい論争と団結のルール・作風をつくり出すのが大きな試金石といえる。

④ 対象について

わが同盟は、社共に代わる革命的労働者党創建の志をもつすべての共産主義分派・労働者グループ・個人と厳明しています。

これについて、ある党派の方々から「労働者グループ・個人を構成とするのはまちがっている。彼らは党オールの対象であって、統合する対象ではない」という趣旨の批判をいただきました。われわれはこの意見に賛同しません。理由は一月提案にのべていますのでくりかえす必要はないと考えます。

確かに、現存する諸党派と労働者グループ・個人が対等に「統一協議会」を構成するのは難しい問題です。しかし、われわれがめざす「協議会」は、これら全国の新たな党を熱望する労働者グループ・個人、独自の自発的役割に成功の鍵があるといえる、新しい質の建党運動だといっても過言ではありません。

そうであればこそ、今日の局面で、自ら党派を名乗ってきた諸分派が、この中で自ら積極的役割を果すことを期待するところです。

上のそれとなく、綱領上のプロレタリア共産主義革命をめざす思想的統一に求めるという綱領・戦術・組織上の一大転換を図ったのです。このことは、一方で連赤総括を一つの契機に、他方で七十年代の朝鮮・三里塚・部落・女性・障害者、など日本階級闘争の前進の局面で開かれた綱領上の諸問題とも相互に関連しつつ、一層深められてきたのです。と同時に、こうした一大転換が、総括できず、すでに腐敗をすら漂よわせていた第二次ブンドの指導部との闘争・分岐、いわゆる党の革命を通じて登場した新しい下部労働者党員などを中心に、革命的分子を総括主体者としておしあげ、これら部分によって組織的継承が図られたのです。

こうして、現在の「赫旗」は、期せずして始った七十年代の一時代に「党の革命」を通じて、七・六事件以来のテロリズムと経済主義の両極の傾向の清算と止揚を、マルクス・レーニン主義の復権と、この下での「分裂から統合」を呼びかけあつた分派によって開き取られたものです。

だからこそ、われわれは「統合」をわれわれの総括の表現であり、たとえささやかであっても七十年代の日本階級闘争の前進の一つの成果であり、日本共産主義運動の現在の分散に終止符をうつその出発点であると誇りをもっている。

これまでの数回の統合の教訓は、単なる連合でなく、綱領にもとずく思想的統一による統合・団結だけが、かつまたこれを実際に階級闘争の要求する思想的質として、自らの革命を通じて開き取り続けることだけが、本物の団結と党を形成していくのだということをおしやっています。

われわれが統合・団結で試練にあつた時、労働者階級・人民の利害に生き、闘うというこの原点に立ちもどって事に当って来ました。その時は必ず、道は開けてきたという深い実感があります。それ故、われわれは革命の大儀ゆえに、団結は力であり大儀だと確信しているのです。

② 第二は、「何よりも赫旗の闘う力の表現が欲しく……少なくとも、第二次ブンドに匹敵するだけの実践的戦闘性を有し、発揮することを願っている」という批判である。

われわれはまず、「日本階級闘争を左から牽引する突出した部隊」として、わが同盟にいぜん多くの弱点があることを自ら深く認識するものです。戦旗・共産同の諸君の批判をお直に受けたいと思う。しかしわれわれは、次のことだけは強調しておきたい。すなわち、第二次ブンドの総括をふまえて、わが同盟は当面する日本社会主義革命を、労働者階級の自己解放の事業であり、これらが全人民をひきいて日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立へすすむ革命と考えています。が故にわれわれは、自らの宣伝・煽動・組織活動を、工場・地域に根を下し、ここを革命の砦とすることに重心をおいています。わが同盟は、戦争と革命の八十年代情勢のこの重要な局面で、工場・地域を基礎とした労働運動を主戦場に、これら労働者階級が全人民的政治闘争を領導し、数十万・百万単位の大衆行動の準備が問われていると考えています。それを、第二次ブンド的なやり方でなく、また戦闘団の隊列でなく、プロレタリア政治を体現する部隊の形成に力を入れ、この成果の登場でもって、われわれは諸君の批判への答えとするであろう。

君達は言う。「日本労働人民が前衛党に求めている力を備えた実体的勢力へとわれわれと共に自らを高め上げていこうではないか」と。

戦旗・共産同と諸君！われわれもまたそれを望んでいる。「統一協議会」の提案、これこそ君達とその革命的意義を認めたいように、こうした日本労働人民の求める革命党へ、われわれが単にブンドの同志達に限らず、志ある他の潮流の同志達と共に、互いを高め、粘りつよくこれを実現する建党運動として可能な方策なのです。君達が今一歩、現下の労働統一をめぐる労働運動の主戦場へ近づき、われわれが今一歩、政治的牽引力を育て上げ、共に闘い、潮流をこえた全国の共産主義者の同志達と、八十年代階級闘争の試練の中で戦闘的団結を築き上

げ、第一次ブンド以来、望んでやまなかつた社共に代る革命的労働者党建の道への一歩として、「統一協議会」の成功のため奮闘しよう。われわれは、それを期待しています。

④ 他の批判について

現在、陰に陽にある批判の最大のもの、「全国大衆共闘機関創建」を「統一協議会」問題で解消しようとしているのではないかという御意見です。

これは、後者で前者を代位させたり、解消させたり、混同したり、あらかじめそうした主観にもとづいて行われるわれわれに対する批判だと考えます。

わが同盟はすでに創立大会、及び第二中総方針で、「安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止を一大頂点とし、三里塚、刑法、狭山、反核……等全人民闘争の数十万単位の大闘争の爆発を組織する」ために、「全国大衆共闘機関の創設」を呼びかけてきました。とりわけ、迫りくる「八三年―八五年」に至る政治決戦は、あらゆる政治勢力との全国的レベルでの共闘を軸とした「大衆共闘機関」の建設を火急の課題としています。

わが同盟はこれを断固推進し、担う用意があります。「統一協議会」はこの「大衆共闘機関」のヘゲモニー組織としてでなく、現実にはそれに一定の共同の責任をおいつつ、単一の革命党が必要とされる指導能力を育てつつも、全く別個に、独自の新しい党をめざしてすすむ建党運動といえます。

最後に、ある部分が「統一協議会」構想が、あたかも「同時代グループ」への敵対物と手前勝手に位置づけて、われわれを支持していません。これは、全くわれわれの提案の誤った理解であり、はなはだ迷惑なことだと考えています。われわれは、現存する共産主義分派・グループが、路線や発想を異にすることを現実として受けとめ、「統一協議会」を提唱しているのであって、当然「同時代グループ」の同志達

とも、共に闘い、新しい建党の大道を共に進むことを願っています。

その点をこの紙上で鮮明にしておきたいと考えます。

※ ※ ※
 以上が、わが同盟・「赫旗」への問いかけと批判に答える態度です。今日、日々情勢は、共産主義者の立ち遅れをつきつけています。八十年代階級闘争の前進をにない、日本革命の展望を主体的に切り拓く鍵である、社共に代る革命的労働者党建の大道へすすもう。「統一協議会」結成のための共同の準備を
 「統一協議会」結成のための共同の準備を
 ※ ※ ※
 急ぎなしとげよう！

全国の共産主義者 団結せよ！
 「赫旗」七月十日、十八号より

(五) 「連合」で新たな革命党はできない

「共労党の提案」に込めて

共産主義労働者党全国協議会が「新しい質の人民的政治主体の出現を促すこと、その求心力、指導的核心たりうる新しい革命党を創出することをめざす」「共産主義者」の連合を提案している。これは我が提案している、社会党、共産党に代る単一の革命的労働者党を建設することを旨とする「共産主義者の統一協議会」と似た位置付けである。したがって、我々は共に新しい革命党建設を担うことを願って、共労党の提案に対する見解を表明したい。共労党も我々の提案に対する見解を表明してほしい。

(1)

共産党は「七〇年代の新左翼運動をどのような立場と方向で総括するか」として、「七〇年代における新左翼運動」を、一方で「疎外された前衛党主義」と他方での「個別具体的な闘争と運動を組織」する傾向に分け、後者を「根拠地」や前線の形成に全力を投入したと肯定的に評価する立場に立ち、しかしながら、後者は「個別の闘争がおよびやすい閉鎖性」という「大きな壁に逢着」しているとし、ここから「新左翼運動を総括するための前進方行」を「個性ある闘争や運動が横につながり、根拠地的な結び目をそなえた新しい質の全国政治を創造すること」を求めている。そして、前者と関連させて、「七〇年代の新左翼運動を総括するうえで避けておとることのできないもう一つ

の問題」として、「マルクス主義がさらけ出した根本的な危機」を指摘し、「マルクス主義、とくにマルクス・レーニン主義の体系として了解されてきた思想と理論」は「人民の闘争や運動を操作し、枠づけるイデオロギーになつていないだろうか」として、マルクス・レーニン主義、とりわけレーニン主義に疑問を投げかけている。

この新左翼総括には、「われわれ自身が痛感している自己総括の意味もこめて」としながら、七一年に旧共労党が赤色戦線派と現伯の共労党と現在の労働者党に三分解した分派闘争の総括、そのうちの自分たちの分派とそう分解した旧共労党の自己批判的な総括、主体的な総括が全然ない。だから総括が客観主義的であり、旧共労党の結成を含む新左翼の形成にかかわる六〇年代の総括が欠落し、果てはマルクス・レーニン主義の否定に迷い込みそうになっている。我々の総括はそうではない。全く逆である。

第二次ブンドは六九年に三分解し、以後、分裂に次ぐ分裂が打ち続いた。分裂の基本的本質的性格は第一次ブンドを総括せずに結成された第二次ブンドは小ブルジョア急進主義であったのが、武装闘争と労働運動をめぐってテロリズムと（戦闘的）経済主義に、小ブルジョア急進主義の諸思想傾向に分裂し、再分裂し、再々分裂したということである。しかし、まず自分たちの分派の破産を自己批判的に総括し、そこからさらにブンドの破産を自己批判的に総括し、もって、テロリズムと（戦闘的）経済主義の小ブルジョア急進主義を清算し、マルク

ス主義のプロレタリア的、科学的な資本主義批判と共産主義思想を綱領の原則として打ち固めて、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得した分派が登場し、統合した。今日の我々、赫旗派である。こうして、ブンドは大分派闘争の時期からマルクス・レーニン主義による統合の時期に進んだ。

新左翼の危機はマルクス主義・レーニン主義の危機ではなく、逆に、マルクス主義、レーニン主義を真に獲得してなく、種々の小ブルジョア・イデオロギーに支配されていた危機である。新左翼における「疎外された前衛主義」とされているであろう中核派と革マル派もマルクス・レーニン主義の前衛党ではなく、前者は小ブルジョア急進主義、後者は経済主義、組合主義、修正主義から転化した社会帝国主義である。また、新左翼において「個別具体的な闘争と運動を組織」し、労働者階級・人民大衆と結合するのが革命党の解体を通じてしかなく、かつ、個別戦線分散主義という「大きな壁」にぶつかっているのも、マルクス・レーニン主義ではなく、種々の小ブルジョア・イデオロギーに原因がある。

マルクス・レーニン主義は否定し、放棄すべきではなく、逆に堅持し、その創造的發展を獲得すべきである。自分たちの分派、自分たちの潮流を主体的に自己批判的に総括すれば、そうなる。共労党はそうすべきである。

(2)

共労党は「共産主義者の連合を形成するうえで、どのような基準と問題意識を共有していくことが必要か」として、八点提起している。以下、検討したい。

「①真の人民革命 コミュニオン革命としての共産主義の立場を貫き、そのなかで（党）の独自の役割を位置づけない」として、

「党」は人民の利益のために、人民を代表して権力を握る主体（広

統的な「前衛党」の概念ではなく）として代行主義、官僚主義を批判しよとしてしているが、「人民自身が自立した革命主体へ自己形成し、権力」になることを媒介する自覚的な契機、指導的核心としての「党」である」という「党」媒介論には反対である。これでは党は組織ではなく、抽象的な意識あるいはヘゲモニーだけになる。

党を超階級的な存在と捉え、階級と対立させてはいけない。そうではなく、党は階級の一部である。労働者階級の革命的な前衛党は労働者階級の一部、その前衛的革命的な部分、その組織である。労働者階級に対する代行主義、官僚主義の党も階級の一部である。しかし、労働者階級の一部ではなく、ブルジョアジーあるいは小ブルジョアジーの一部であり、その労働者階級に対する支配あるいは影響を体現しているのである。だから、官僚主義、代行主義の批判からは、労働者階級の前衛党の否定を導き出しはならず、労働者階級の真の前衛党、真に労働者階級の前衛的革命的な部分で、真に労働者階級の大衆と結合した党の建設を導き出さなくてはならない。こうして、労働者階級の前衛党の概念は「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である」とこと対立しはしないのである。党を抽象的な意識だけに「党」媒介も、実は階級的な論理、小ブルジョアジーの論理である。

では、労働者階級の革命的な前衛党はどのような内容で組織され、どのような内容で労働者階級の大衆を指導するのか？ そもそも何故、党が必要で、指導が必要なのか？

資本主義はブルジョアジーが生産手段を独占し、労働者階級を経済的に従属させた賃金奴隷制であり、ブルジョア国家はブルジョアジーが国家権力を掌握し、労働者階級を政治的に抑圧し、資本主義の賃金奴隷制を維持している。ブルジョア階級独裁である。だから、労働者階級の解放のためには、資本を収奪し、生産手段を労働者階級が共有し、共産主義を実現しなければならず、共産主義の実現のためには、ブルジョア国家権力を暴力革命で打倒し、労働者階級が掌握するプロレタリア階級独裁の国家権力を樹立しなければならない。

しかし、資本主義は労働者階級とブルジョア階級が労働力の売買を通じて対等の商品交換関係にあるという外皮で蔽われ、ブルジョア国家は国民の自由と平等というブルジョア民主主義の外皮で蔽われている。そして、この商品交換関係とブルジョア民主主義がブルジョア・イデオロギーを生み出している。だから、労働者階級の階級闘争において、自然発生的な大衆の闘争は商品交換関係に依拠した賃上げや合理化の経済闘争であり、ブルジョア民主主義に依拠した政策阻止、政府打倒の民主主義闘争であり、ブルジョア・イデオロギーに影響された、資本主義社会とブルジョア国家の枠内での改良闘争である。したがって、ブルジョア国家権力を打倒し、資本を収奪するプロレタリア階級独裁、社会主義革命を目標として、労働者階級の革命的衝動的部分を組織した党が必要であり、前衛党が労働者階級の階級闘争において、ブルジョア・イデオロギーと闘争し、商品交換関係とブルジョア民主主義の外皮で蔽われた資本主義とブルジョア国家の黄金奴隷制を批判、暴露し、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を宣伝扇動する目的意識的な指導を大衆に対して行なわなければならないのである。以上のことを我々はブンド総括として導き出し、マルクス主義の資本主義批判、共産主義思想として綱領の原則に打ち固めている。共産党の主張は、党が組織される内容、指導する内容が抽象的であり、そもそも何故、党と指導が必要かがいまいである。「マルクス主義を自己批判的に対象化する」前に、自分たちがマルクス主義であったか、どうかを自己批判的に対象化すべきである。

〔4〕共産主義革命の内容を、資本主義の近代の総体を変革し、止揚する解放としてとらえかえし、新しい水準で提示しなす。〔5〕解放と革命の全過程にとつて、人民の手で独自に形づくられる自立した共同性の世界の原型である。根拠地のあるいは地域のコミューンの運動体、あるいは「対抗社会」を創造していくことが、欠かすことのできない役割を演じる」について。

革命の眼目は国家権力の問題であり、生産手段所有制の問題である。

主義の生産関係であり（原子力、核は生産力ではなく、生産力の最大の要素である人間と自然を破壊している）であり、資本主義の生産関係が生産力の発展の桎梏となった典型である）、ブルジョア国家、ブルジョア文化であるのに、この打倒対象をいまい、生産力そのもの、国家一般、全ての文化を否定するような論点はプロレタリア階級独裁、および社会主義による生産力の発展とプロレタリア文化の創造を否定することに通じるので、反対である。

「革命の過程そのものが将来社会の原像を育てあげる」。「資本と国家と近代知によるピラミッド型社会編成の抑圧的なあり方に対抗して……それは別の独自のつながり、生産、生活、闘争の新しい様式をそのふところ育てあげる場を創出する」。

何度もいうように社会制度の根幹は生産手段所有制であり、社会制度は国家制度によって集中的に表現され、維持される。資本主義社会では生産手段は資本家階級に独占され、それは資本家階級が掌握するブルジョア国家権力によって維持されている。したがって、資本家階級を収奪し、生産手段を労働者階級が共同所有する社会革命なしには新しい社会、社会主義は実現されないし、それには暴力革命でブルジョア国家権力を打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立する政治革命が不可欠の条件である。資本を収奪する社会革命なしに、まして、ブルジョア国家権力を打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立する政治革命なしに、ブルジョア国家と資本主義社会の内部に新しい社会、社会主義を創出できるとするのは、民主主義的社会改良を社会革命、社会主義と粉飾し、小ブルジョア階級の小商品生産とプロレタリアートの労働力という商品を良好な条件で売るための賃上げや合理化の経済闘争を社会主義と粉飾することであり、実際は改良主義である。

と同時に、プロレタリア階級独裁は社会主義の集中的表現、テコであり、労働者階級の階級闘争を政治革命、プロレタリア階級独裁に発展させるためには、社会革命、社会主義の要求を基礎とし、集中しなければならぬ。また、労働者階級の社会改良の闘争も、資本家階級

このことをいまいにすれば、改良主義あるいは無政府主義になる。「古い形態の支配と抑圧をうち破った人民革命が、なぜ、より強大な抑圧と新しい支配の体制を誕生させてしまったのか」ソ連の変質は国家権力と生産手段所有制の性質の変化である。つまり、官僚主義によって、プロレタリア階級独裁の国家権力が労働者階級人民の民主主義ではなくなり、逆に、労働者階級人民を抑圧するものとなり、それによって生産手段の国家所有が労働者階級人民の生産手段共有、社会主義ではなくなり、官僚が生産手段を独占するものとなり、こうして官僚が階級、官僚ブルジョア階級となり、官僚ブルジョア階級独裁の国家と官僚制国家資本主義の社会になったのである。

「現代社会主義をふくめて近代的生産力、近代国民国家、近代的な知（巨大科学技術に代表される）の支配の全体をくつがえす解放、すすなわち政治、社会、文化のすべての面をつつみこむ総体的な革命」。

ソ連の国家権力と生産手段所有制の変質をもたらした官僚主義は文化などの上部構造と生産関係における分業制や分配制の面での資本主義の残存物に根拠を有していた。だから、プロレタリア階級独裁を樹立し、生産手段を労働者階級の共有にするだけでなく、官僚主義に対する闘争、文化の面あるいは分業制や分配制の面の資本主義の残存物に対する革命を実行しなければならない。このことには賛成である。プロレタリアートの社会革命、プロレタリア共産主義革命はそういうものである。しかし、その場合、官僚主義に対するレーニンの最後の闘争や毛沢東のプロレタリア文化大革命、社会主義におけるプロレタリア階級独裁の下での継続革命の理論と実践を、それが正しく実行されなかったり、小ブルジョア急進主義的、空想共産主義的に行き過ぎたことを総括しつつ、継承し、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させるべきであった、否定すべきではない。

その上で、官僚制国家資本主義であるソ連を社会主義と見るのは社会主義を否定することに通じるので反対である。さらに、プロレタリア革命が覆すのは生産力ではなく、生産力の発展の桎梏になった資本

が生産手段を独占し、国家権力を掌握している社会と国家の体制の問題に直面し、ブルジョア国家権力を打倒し、資本を収奪する政治革命、社会革命の要求を組織する条件となる。だから、我々は共産党の論のような社会改良主義的無政府主義的な「根拠地」論、「対抗社会」論に反対する。プロレタリアートの社会革命の路線、政治、経済、文化の全戦線、全分野で労働者階級の階級闘争を組織し、資本主義の黄金奴隷制とブルジョア国家のプロレタリア階級独裁を批判、暴露し、資本を収奪する社会革命の要求を組織し、基礎とし、工場を革命の根拠地、砦とし、ブルジョア国家権力を打倒するプロレタリア階級独裁を準備する路線を提起する。

〔8〕「階級」の方法概念と実体の再検討」について。

「伝統的な「階級」概念で把握されてきた日本の労働者・人民の姿は……資本と国家が次々と導入してきた高度の支配と管理の様式のもので、大きく変貌しつつある」というが、資本家階級が生産手段を独占し、生産手段から分離した労働者階級を経済的に従属させている生産手段所有制を根幹に、生産における人と人の関係で資本家が労働者を強制的に指揮して労働させ、生産物の分配の面で資本家が労働者の剰余労働を搾取しているという、マルクス・レーニン主義の規定した、資本主義における階級と階級関係は全然、変化してはいない。

共産党は、今日の労働者階級の状態の新しい現象形態に目を奪われ（われわれはこれを否定しないが）、これら資本主義における階級と階級関係の核心を洗い流し、マルクス・レーニン主義の「階級概念」を投げ捨て、すでに破綻が露わとなった自らの人民路線の誤りを、新しい革命党の規準に拡大しようとする。

最後に、日本の「共産主義者の連合」の基準である以上、日本帝国主義を打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立する社会主義革命という日本革命の政治路線が絶対必要で、不可欠である。ところが、共産党の提案にはない。日本帝国主義打倒の社会主義革命という日本革命路線は、暴力革命、プロレタリア階級独裁の原則と共に、日和見主義

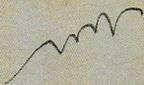
の共産党と袂別した新左翼の革命性の根幹であり、これをあいまいにすることは新左翼の日和見主義的清算である。

このように、新しい革命党の呼びかけの規準から、共同して闘うべき日本労働者階級人民の敵―日本帝国主義打倒が欠けることは、共産党が、階級概念―階級・階級闘争や、共産主義と労働運動の結合の見地と共に、反帝国主義の立場をも放棄する宣言となっていることを指摘したい。

共産党のいう「連合」という表現は、こうした、小ブルジョア的な見地、革命的共産主義の否定を含んだ思想の組織的表現なのではなからうか。

われわれは、社会党のような共同戦線の党、戦前の猪俣の横断的左翼などの再版を望むなら別だが、こうした「連合」論から、新しい革命党の創出はできないと考える。

(終了)



社共に代る革命的労働者党創建にむけた

わが同盟の提案

1982年10月30日

発行 赤路社 東京都大田区大森北1-13-11

☎03(766)4729

関西赤路社 大阪市福島区大開

1-19-13副島ビル

☎06(462)7030

定価 400円